Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-03

第1章 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

井上, 舞 ; 品田, 裕 ; 奥村, 弘 ; 内田, 雅夫 ; 河野, 克人 ; 佐々木, 和子 ; 吉川, 圭太 ; 跡部, 史浩 ; 石松, 崇 ; 大槻, 守 ; 白水, 智

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,18（2019（令和元）年度事業報告書）:1-32

(Issue Date)
2020-03-22

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012153

第1章
地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

第18回　歴史文化をめぐる地域連携協議会「地域歴史遺産を未来につなぐために－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」

2020年2月2日（日）、神戸大学瀧川記念学術交流会館において、第18回歴史文化をめぐる地域連携協議会が開催された。今年度のテーマは「地域歴史遺産を未来につなぐ－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」とした。

人文学研究科主催の本協議会は、同研究科地域連携センターの1年間の活動を総括する目的で開かれている。今年度は、地域歴史遺産の継承の問題を取り上げた。午前中の第1部では、地域での活動報告として、2名の方にご報告いただいた。午後からの第2部では、協議会のテーマに沿って、阪神・淡路大震災以降、震災資料の保全・活用に携わっている本学教員2名と、兵庫県美方郡香美町、および姫路市香寺町で地域歴史遺産の継承に取り組む2名より報告いただいた。その後、第3部で全体討論を行った。

全体討論では、震災資料の継承や公開のあり方、地域歴史遺産を残していくための地域の関わり方など、全体を通して活発な意見が交わされた。

なお本協議会は、兵庫県教育委員会との共催で開催された。また、平成27年度文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の採択事業である、「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」、および協定に基づく人間文化研究機構と東北大学との連携による「歴史資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」、科学研究費助成事業・特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」の一環としても開催された。当日の参加は48機関86名であった。

以下、当日の記録を掲載する。当日配布された予稿集については神戸大学学術成果リポジトリに掲載されているので参照されたい。

（文責・井上舞）

開催趣旨

1995 年 1 月 17 日、兵庫県南部地震の発生により引き起こされた、阪神・淡路大震災から今年で 25 年を迎えます。地震や火災によって、建物は倒壊。交通網やライフラインも遮断され、多くの人命が失われました。また、人や建物の被害のみならず、地域に残された数多の歴史資料も被災しました。このとき始まった、被災した歴史資料の救出活動を契機に、2002 年、人文学研究科地域連携センターは発足しました。被災資料を救出する活動は、その後様々な形で全国に展開し、現在も各地の被災地で活動が続けられています。

震災によって新たな資料も生まれました。震災に関連して作成された公文書をはじめとして、地震発生時に止まった時計、避難所で配られたチラシ、被災地を写した写真などの、いわゆる震災資料です。こうした資料の保全活動は、25 年の歳月を経てなお、継続して行われています。あわせて、聞き取りを通じて、発災時の様子や復興への取り組みなど、人々の記憶を記録する活動も行われています。

この間、街の復興は進んできました。その一方で、25 年という歳月の中で、記憶の風化、震災資料の保管やこれをどう活用していくかといった問題も生まれてきています。今後、さらに年月を重ねる中で、阪神・淡路大震災を通して生まれた記憶や記録を、どのように後世に伝えていくかが課題となっています。

一方、発災時ほど急激でないにせよ、近年日本の諸地域でも地域の記憶や記録を継承していくことが困難な状況が発生しています。兵庫県下においても過疎化や少子高齢化が進み、地域に残された歴史資料を引き継ぐことができない、伝統芸能を継承していけないという地域が数多く存在します。こうした事例は、山間部の過疎地域に限らず、都市部近郊の、いわゆるオールドニュータウンでも起こっています。同様の問題を抱える地域は、今後も増えていくと予想されます。地域に残された歴史遺産を次の世代に引き継ぐことが容易でなくなりつつある今日、誰が、どのように、これらを守り、受け継いでいくのかが課題となっています。

こうした状況を踏まえつつ、今回の協議会では「地域歴史遺産を未来につなぐために」をテーマとしました。阪神・淡路大震災以降、災害の記憶と記録を守り、継承してきた 25 年間の活動や、過疎化が進む中で、様々な工夫をこらしながら地域の歴史を後世に引き継いでいこうとする香美町の取り組み、子どもたちと地域の歴史を調べる香寺町の取り組みに学びつつ、地域歴史遺産をより良い形で未来につないでいくための方策について、皆さまと議論していきたいと思います。

本年、文学部は 70 周年を迎えますが、本センターは地域と連携した教育・研究において重要な役割を担ってきました。私たちはこの協議会自体が、多くの参加者の間でつながりが生み出される〈場〉となることを願っています。そのため協議会の合間にできる限り時間をとり、各団体の方々が交流できるコーナーやポスターセッションの場を設けたいと考えています。多くの方々に活動の成果物や書籍をお持ち寄りいただき、展示・交流していただければ幸いです。多数のご参加をお待ちします。

プログラム

第 18 回　歴史文化をめぐる地域連携協議会
地域歴史遺産を未来につなぐ―阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える―

11:00　開会挨拶
　　品田 裕（神戸大学理事／副学長）
11:05　開催趣旨
　　奥村 弘（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター長）

第１部　活動報告

11:20　活動報告①

内田 雅夫（住吉歴史資料館）「住吉歴史資料館の活動－変質するだんじり祭を見て 25 年前の震災復興を思う－」

11:40　活動報告②

河野 克人（丹波篠山市立中央公民館）「地域のお宝をどうすればよいか－地元に残る古文書を題材として－」

12:00　質疑応答

12:10　昼食・交流会

第２部　テーマ協議「地域歴史遺産を未来につなぐために－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」

13:10　問題提起

井上 舞（神戸大学大学院人文学研究科）

13:15　報告①

佐々木 和子（神戸大学連携推進室）「阪神・淡路大震災を残すために」

13:40　報告②

吉川 圭太（神戸大学大学院人文学研究科）「阪神・淡路大震災の記憶を歴史としてつなぐために」

14:05　休憩

14:15　報告③

石松 崇（香美町教育委員会）「地域の記憶をつなぐために－香美町無住化集落の場合－」

14:40　報告④

大槻 守（香寺町史研究室）「地域の歴史を伝える－中学校と連携して－」

15:05　コメント

白水 智（中央学院大学法学部／地域資料保全有志の会）

15:30　休憩・交流会

第３部　全体討論

15:50　討論（司会：奥村 弘）　～ 17:00

17:30 ～ 19:30　情報交換会

開催挨拶

品田　裕
神戸大学理事・副学長

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました神戸大学の地域連携推進担当理事の品田でございます。本日は「第 18 回　歴史文化をめぐる地域連携協議会」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。開会にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。

神戸大学では地域連携事業の一環として 2002 年度に人文学研究科地域連携センターを設立しました。本学の地域連携事業の中では最も早い取り組みと聞いております。以来、当センターでは歴史文化や地域歴史遺産の保全活動を目的として、自治体や住民団体の皆様と連携事業を進めてまいりました。その後、本学では農学研究科と保健学研究科また他の分野でも地域連携センターを設立し、幅広い分野にわたる地域連携事業を大学として重視して展開しております。この場をお借りしまして各事業にご支援いただいております皆様に厚く御礼を申し上げます。

さて、人文学研究科地域連携センターでは年度の終わりに一年間の活動を集約する意味を込めまして、県内の自治体の職員・市民・大学代表者・大学関係者の皆様とともに地域の歴史文化について議論をする協議会を開催しております。今年度は 18 回目で「地域歴史遺産を未来につなぐために－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」というテーマで開催させていただきます。

ご案内の通り、今年は阪神・淡路大震災から 25 年目の節目の年でございます。この間、災害の記憶を後世につなぐため震災資料の保存･活用、あるいは被災者の方からの聞き取りなど、様々な活動が精力的に行われてまいりました。しかし一方で、この 25 年という歳月は大変重いものでございまして、記憶の風化、あるいは膨大な震災資

料の保管、そういった問題が生じてきております。今後さらに年月を重ねる中で、阪神・淡路大震災を通して生まれた記憶や記録をどのように後世に伝えていくのか、これが大きな課題かと思います。

また、災害のように急激ではありませんが、近年日本の諸地域でも地域の記憶や記録を継承していくということが困難という状況が起こっております。少子高齢化あるいは一局集中といった問題は日本全体を覆う問題でございます。兵庫県下においても地域に残された歴史資料を引き継ぐことができない、伝統芸能を継承していけない地域が存在します。地域に残された歴史遺産を次の世代に引き継ぐことが容易でない。こういう今日、誰がどのようにこれらを守り受け継いでいくのかということが課題であります。

こうした状況を踏まえつつ、今回の協議会では阪神・淡路大震災以降、災害の記憶と記録を守り継承してきたこの25年間の活動、あるいは過疎化が進む中で様々な工夫を凝らしながらも地域の歴史を後世に引き継いでいこうとされております香美町の取り組み、子どもたちと地域の歴史を調べる香寺町の取り組み、これらに学びつつ地域の歴史遺産をより良い形で未来につないでいくための方策について皆様と議論してまいりたいと思います。

神戸大学では平成27年度に文部科学省より「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」、いわゆるCOC+事業に本学が代表校となり申請した「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム事業」が採択されました。平成29年度には、大学共同利用機関法人人間文化研究機構による、各地の大学による歴史文化資料保全の取り組みを推進するために「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」が始まりました。神戸大学は東北大学とともにこの事業の拠点大学の一つとして活動しております。さらに今年度からは、科学研究費助成事業の特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」が採択され、現在この人文学研究科地域連携センターが拠点となっております。この科研費というのは主に理系中心になっておりまして、特別推進研究は国から認められた非常に重要な研究ではございますが、文化系の取り組みで採択されるというのは極めて珍しいことで、大学としても大変期待しているところでございます。

最後になりましたが、本協議会を共催していただきました兵庫県教育委員会をはじめとする諸機関の皆様、ご協力いただきました関係者の皆様に対して神戸大学を代表して深く感謝を申し上げます。

本年は神戸大学文学部創立70周年記念の年でございます。この記念事業の一つとして今日の協議会が実り多いものになりますことを祈念いたしまして簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

主催者挨拶・主旨説明

奥村　弘
神戸大学地域連携推進室長
人文学研究科地域連携センター長

おはようございます。たくさんお集まりいただきありがとうございます。18回目になる地域連携協議会をこれから開催させていただきます。

先ほど理事からご紹介があったように、今年度の一番大きなテーマはやはり阪神・淡路大震災から25年が経過したということです。その記憶をどのようにつないでいくか。現在はこの記憶の継承をめぐる大事な時期になってきていると思います。これについては震災から15年を経た段階でも話に出ました。15年経つと、大学に入ってくる学生さんたちが震災を知らなくなりました。25年経ちますと、社会の中核になっている30代の方々も震災を直接体験していない人で構成されるようになります。こういった状況のなかで私たちがどのように震災の記憶を継承していくかを考えた場合、「歴史」として継承していく以外もう道はありません。「歴史」として継承していく

際に鍵となるのが、震災資料の収集・保全と体験の記録化になります。この二つの取り組みがますます重要になっていると思います。

実はそうした取り組みを行っている各地の図書館の関係者に話を聞く会を1月31日に設けまして、その前日には東灘区や灘区の震災遺跡・遺構をめぐるフィールドワークも行いました。その中で阪神高速の資料の保管庫を久しぶりに見せていただきました。そこには、倒壊した阪神高速の橋梁の一部やコンクリートの破片などがそのままの形で保管されています。関係者の話によると、当初は新たな高速道路を作るための研究資料として残していたが、その後、阪神・淡路大震災の被害を語り継ぐためにその資料は活用されるようになったそうです。遺跡や遺構を含め、残されたものは時代の流れの中で違った意味を付与されることになり、重要性が逆に増していくわけです。おそらく地震の強力な力を視覚的に感じることができる資料は他にはないのではないでしょうか。こういった場所を見学しながら災害の歴史がどういう風に継承されていくのかを考えました。

東日本大震災は来年で10年となりますが、神戸での経験をきちんと集約して、今新しくそういう問題に取り組まれている東北各地の人たちにお伝えして参考になればと考えています。今回の協議会はそれが一つの柱なのですが、同時に伝えていくべき歴史とは何かということもしっかり考えたいと思っています。

防災関係の研究会でよく言うのですが、災害の歴史や記憶だけが伝わることはまずありません。記憶は周囲の歴史的なものとの関係性の中で伝わるものです。この周囲というのがすなわち地域になるわけで、問題は「地域の記憶をどのように伝えていくのか」ということになります。災害の記憶もこの中で考えなければなりません。

その点からすれば、兵庫県北部を中心に地域の記憶の継承はかなり厳しい状況にあります。これはいろんなところで喋っておりますが、兵庫県北部のほぼ全ての市町で人口が江戸時代のそれを下回るようになりました。今回の協議会ではそうした地域での取り組みについても取り上げており皆様と共有しておきたい問題の一つとなっています。

予稿集の3頁にありますように、協議会は3部構成です。第1部は「活動報告」となっています。毎年、第1部では地域の中で様々な活動を展開している方に報告いただくことになっており、今回は住吉歴史資料館の内田雅夫さんと丹波篠山市立中央公民館の河野克人さんにお願いしました。第２部では協議会のテーマ「地域歴史遺産を未来につなぐために－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」について、阪神・淡路大震災の記憶の継承を神戸大学の佐々木和子さんと吉川圭太さん、人口減少社会における記憶の継承を香美町の石松崇さん、学校教育との連携を香寺町の大槻守さんに報告していただきます。それから地域史料保全有志の会で粘り強く活動を続けている白水智さんよりコメントをいただきます。そして、第3部の「全体討論」でフロアの皆様を交えて議論したいと思います。

地域連携センターが出来て今年で18年になります。協議会も今回で18回目を迎えました。また、今年は神戸大学に文学部の前身が出来てから70年となります。文学部設立の経緯を歴史的に紐解くと、敗戦後の日本でこれから大事になるのは文化ではないか、という意識があったわけです。文化を後世に伝えていくことのできる人材を育成するために文学部は作られたのです。広く見れば地域連携センターの活動もそうした意識を受け継ぐものです。そして、阪神・淡路大震災の記憶が徐々に薄れていく中、地域の歴史文化をきちんと伝えていくためにはどうしたらよいのだろうかという問いの中で、2002年に地域連携センターは生まれました。

本日は長時間のプログラムとなっていますが、堅苦しい会にはしたくありません。お昼休憩や休み時間を利用してご参加の皆様が気軽に交流できる場になればと思っています。私も長い間の資料の保存に携わっておりますけれども、やはり一番大事なのは「人と人とのつながり」です。この協

議会で様々な人と交流を深めていただき、「人と人とのつながり」が少しでも広がればと思っています。それでは本日一日よろしくお願いいたします。

第１部　報告①
住吉歴史資料館の活動－変質するだんじり祭を見て 25 年前の震災復興を思う－

内田　雅夫
住吉歴史資料館

おはようございます。住吉歴史資料館の内田です。神戸大学の先生方には資料館での活動について本当にお世話になっておりまして、この場を借りましてお礼申し上げます。こういう機会を与えていただきまして大変感謝しております。

東灘区の人口は 21 万人なのですが、その 7 割以上が既にもう外から来た人となっています。残りの 3 割ぐらいが地元の人です。その中で東灘区の五ヶ町村に住み続けている人は 2 割にも満たないのではないでしょうか。そういう人たちがだんじり祭りを担っています。ですから、だんじり祭りの継承というのは、この協議会のテーマであります阪神・淡路大震災 25 年の記憶の継承とも共通する課題だと思います。

阪神・淡路大震災のあった 25 年前というのは、コミュニティといいますか地域社会がまだしっかりしていて、だんじり祭りも非常に身近な存在でした。また、地域に遺された歴史的なものを駆使して復興にも協力しました。例えば、住吉地区は住吉川水系の水を、農業用水や水車による精米に利用してきました。ですので、地元の人は水の流れを熟知していたわけです。震災後、神戸市立住吉中学校が避難所になるわけですが、そこで問題となったのがトイレの水です。断水していますから。そこで、地元の人は水路をうまく利用してその問題を解消しました。あるいは、火事が発生した時に、火事の現場と水路の間に人を立たせてバケツリレーで消火したという事例もあります。以上は記録として書き留めていますけども、ここで言いたいのは地元の人にとっては当たり前のことでも、神戸大学の先生方に「内田さん、これはすごいことですよ」と強く言われまして、残していきしょうというアドバイスをいただいたことです。これからこうした記録をどのように活用するかが問われているわけです。

話は変わりますが、だんじり祭りは女性の参加がキーだと思っています。ここでの参加というのは裏方、賄い方のことです。賄い方の女性が作るご飯はメニューがとても豊富です。握り飯のほか、私の住む山田地区では蕗と筍の煮染めが伝統的な名物です。それが今やサンドイッチやカレーやとんかつも作るようになって、バラエティに富んできています。だんじりを引くのは 100 人ぐらいですが、この賄い方は 10 人～ 15 人ぐらいの女性で構成されています。地区の会館にはだいたい 100 人～ 200 人ぐらいまでの食事を準備できる設備があります。実はここも阪神・淡路大震災の時に炊き出しをする場所として役に立ったのです。

私はだんじりの引き手でもありますが、本日一緒に来てくれた幼なじみの前田康三さんとは小さい頃からだんじりを追いかけまわした仲間です。だんじりがいまどこを通っているかは、水の音で全部分かるのです。私に限らず、太鼓を教えてくれたおっちゃんや周りの世話方の人たちも全員分かります。ですから、震災の時に火事が起きても、現場と水路の関係を瞬時に把握できたため速やかな消火活動にあたれたわけです。もちろんこうした活動は震災復興の中心に位置したわけではなく、あくまでも「手助け」程度のものでした。しかし、この「手助け」が非常に重要だったとも思うのです。

賄い方の女性の話に戻ります。彼女たちがだんじりを見る機会は会館の前を通る一瞬だけです。その時に台所から出てきて拍手するわけですが、彼女たちは一瞬でその年の祭りの善し悪しが判断できるのです。また、住吉のだんじり祭りの特徴は若い子が屋根に乗る点なのですが、その子が誰

かもすぐに分かる。だんじり祭りは町内の子供の成長を確認する機会にもなっていたのです。こういう人たちによって構成されたコミュニティは、非常時のデマについてもきちんと対処できるし情報共有も素早い。阪神・淡路大震災の時にも大いに機能しました。

ところがいまは難しい。住吉もすっかり人が変わってしまいました。ですから最初の方で申し上げた継承が課題となっているわけです。いま、私が取り組んでいるのはだんじり祭りの歴史をきちんとまとめることです。伝統を踏まえた楽しいだんじり祭りは、25年前は出来ていたのです。阪神・淡路大震災の記憶継承についてはある程度出来ていまして、住吉歴史資料館の私たちが神戸大学の先生方の支援と指導を受けて『阪神・淡路大震災資料集　住吉の記憶』Ⅰ～Ⅲとしてまとめることができました。それから、『わたしたちの住吉』という分かりやすい住吉の地誌にも災害編を作り、住吉と災害の歴史についてまとめています。ただし、作ったとはいえこれが浸透しているとはとても言い難い。何度も述べていますように人が変わっている状況ですので、区役所と連携しながら新しく来た人にも読んでもらいたいと思っています。歴史の知恵をこの本からは手に入れることができると思っています。

それから最後になりますが、良寛和尚というお坊さんの話をしたいと思います。子供たちと手鞠をついて遊んでいたというイメージをお持ちの方もいると思います。実際、彼は「子どもらと手鞠つきつつこの里に遊ぶ春日はくれずともよし」と詠んでいます。とてもいい歌だと思います。一方でこのお坊さんは1828年の新潟越後の三条地震で被災した友人に宛てた手紙の中で、「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候　死ぬる時節には死ぬがよく候」と記しています。「諦める」ことを前面に押し出したものですが、実は「諦める」というのは「明らかに観る」という意味で、無情の現実をはっきり見よう、自然に対して謙虚になろうということを訴えた文章です。災害は防げない。想定してもそれ以上のものがやってくる。「災害は忘れた頃にやってくる」ではなく「災害は覚えていてもまたやってくる」というのがこれからの世の中だと思います。80年前の阪神大水害の時、当時の住吉村の村長・横田政次郎の書いた文章の中に「この秋は雨か嵐か知らねども今日の務めの田草とるなり」とあります。秋に大雨や台風は来るかもしれないが、今日の仕事はきっちりやろうということですね。

住吉の標語は「常ニ備ヘヨ」なのですが、これは甲南学園創立者の平生釟三郎先生の言葉です。心構えこそ最強の防災対策であることを意味します。つまり、満足する生き方をしておれば「今死ねるか」と言った時に「死ねる」と言える。そういう暮らしが大事だということになると思います。書き残された記録類を利用すること、常に備えておれば何事も怖くないということ。この二つの心持ちを大事にしながら住吉歴史資料館での活動を続けていきたいと思っています。以上です。どうもありがとうございました。

第１部　報告②
地域のお宝をどうすればよいか－地元に残る古文書を題材として－

河野克人
丹波篠山市立中央公民館

皆さん。こんにちは。丹波篠山市立中央公民館の河野と申します。よろしくお願いいたします。現在、地域連携センターの方には、丹波篠山市の伝統的建造物群保存地区の福住地区の調査でお世話になっています。また、古文書入門講座の講師として神戸大学の松本充弘さんにもお世話になっています。そういった関係で、今回お話させていただくことになりました。

古文書入門講座は私の担当でして、ここで地域の古文書を活用しています。この古文書を題材に地域の文化財の継承や活用の話につなげていきたいと考えています。丹波篠山市では公民館に文化講座をいくつか設けているのですが、その一つに

古文書入門講座があります。地域に伝わる古文書を通して市民に文化財の大切さや価値を知っていただき、地元に対する興味と愛着を持っていただくことを狙いとした講座で、初心者を対象としたものです。

平成の大合併に際していの一番に合併したのが篠山市なのですが、合併前にあった4つの町、篠山町・今田町・丹南町・西紀町の内、篠山町の公民館事業として始まりましたのがこの古文書入門講座です。地元の方から古文書を読みたいという要望があり、篠山町にお住まいの郷土史家・中野卓郎先生に講師をお願いして講座は始まったと聞いております。現在は年に8回の講座を設けています。3月ぐらいから市民の方にチラシをお配りしまして周知を図っています。6月に開講しまして1月まで毎月1回開催します。開催日は6月から12月までは第1月曜日、1月は第3月曜日。開催時間は午後1時半〜午後3時半までです。受講生は市内在住・在勤の方で50名限定での募集をかけています。今年度の受講者は33名でしたが、50数名の方に応募いただいたこともあります。

丹波篠山市には古い木造の旧裁判所を改装した歴史美術館があります。そこの収蔵庫自体も昔の蔵を改装・修理したものなのでスペースも限られおり、今後考えなくてはならない事案なのですが、そこに美術資料と歴史資料が保管されています。

古文書資料については、先ほど触れた郷土史家の中野先生が収集したものが中心です。丹波篠山の泉という地区の「山田家文書」もその一つです。これは、畑で燃やされそうになっていたのを中野先生が救出したものです。これは庄屋史料になるのですが、篠山藩の家臣の家に伝わった武家関係の史料もあります。こういった丹波篠山市所蔵の史料を講座で活用しているのですが、他にも寺院史料として旧今田町所在の和田寺が所蔵する兵庫県指定文化財の「和田寺文書」を住職さんに許可いただき講座で取り上げました。さらに、篠山藩の関連資料としまして、青山藩の殿様が大坂城代を兼ねていたときの史料を取り上げたこともあります。

現在はこれらの史料を用いながら、片山正彦先生・松本充行先生・鬼頭尚義先生の3名の先生に講師をお願いして講座を開催しています。昔は先ほどふれた中野先生が講師となり、年に一度特別講座として兵庫県立歴史博物館の学芸員さんを特別講師としてお招きしたこともありました。

講座の特徴としまして、受講生は通算6年で受講を終了する規定となっています。あくまでも「入門」講座である点と、先ほど申し上げたように、地域の文化財の大切さを広く知っていただくことが狙いですので、通算6年で卒業していただき、受講者が回るようにしています。それから運営は受講生が主体となっています。年8回の講座の内、最初の開講式と11月に開く古文書にまつわる地域に市バスで移動してそこで講義を受ける現地研修会を除く6回の講座については、受講者をグループ分けして交代で受付や資料の配付をお願いしています。

20年以上続けてきていますが課題もあります。まず、受講終了後の市民の方の受け入れ先がない点です。地域の古文書研究会のようなところが受け皿になっていただくのがよいと考えているのですが、そういったグループも構成員の高齢化によって受け入れができないのが現状です。次のステップに進みたい受講生の声はあるので、それに応える必要があります。

それから、市史編纂に関わる問題もあります。今年度より丹波篠山市では市史編纂が始まり予算がつきました。だいたい10年計画ぐらいで市史を作成しようという話にはなっているのですが、意欲のある受講生さんがそこにどういった形で関わりを持てるかは不透明なところがあります。最後の話にもつながってきますが、古文書入門講座受講生の活躍の場になればよいと私は考えています。どのような場面で地域の方々に活躍いただくかは今後の課題です。

さて、予稿集には「どんなに貴重な史料であっても、関心がなければただのものに過ぎません。地域に眠る古文書を守るためには、まず、市民に、

地域の「お宝」である古文書の価値に気づいてもらうことが最大の課題です。なぜなら、市民が自分たちの生まれ育った地域に愛着や誇りを持つことが、これらの文化財を次世代に伝えていく原動力となる」と書きました。これは10年ほど前に今田町立杭にある県立の陶芸美術館の学芸員でした松岡千寿さんの報告「「丹波焼における地域資源の保存と活用－焼き物の郷におけるフィールドミュージアムの形成に向けて－」から引用したものです。もとは「古文書」のところが「焼き物」となっていました。これは全ての文化財に言えることではないかと思います。

神戸市などの阪神間の大きな自治体ではそれなりに経験豊富な学芸員が配置されており、文化財行政はある程度しっかりしていると思うのですが、地方に行きますと丹波篠山市のように文化財課こそあるものの、経験豊富な学芸員が配置できないというのが実情です。本来は学芸員などの専門職の人が中心になって地域の方々と一緒に文化財保存の問題を考えていかないといけないのですが、それができないわけです。

こうした状況ですから、丹波篠山市ではやはり文化財に関心を持つ市民を少しでも多く増やしていくことが、保存・活用につながっていくのではないかと思います。普段の生活の中で政治経済や社会は話題になりますが、イメージとしてはそこに文化財が入ってくるような環境ですね。行政側の状況も変えていく必要はもちろんありますが、それと同時に地域の文化財を守っていこう、伝えていこうという動きの広がりが大事になってくると思います。

市史編纂が始まりましたが、今後はどこにどういった史料があるのか地区ごとに悉皆調査が必要となります。そういった時に、それぞれの地区の史料保存状況に詳しい人が求められます。今年の古文書入門講座の受講生の中に、福住地区の街づくり協議会の代表の方がいらっしゃいます。その方が先日、自身が所持する古文書の展示についての相談を私に持ちかけてくださいました。私はとても嬉しかったのですが、来年の講座の11月の現地研修会を福住にして受講生の皆さんにその方の活動を実際見ていただくのはどうだろうかと考えています。

これからの文化財行政、行政側だけではうまくいきません。やはり地域の人間が地域の文化財を守るという環境をいかに整えていくかが問われていると思います。以上で終わります。ありがとうございました

質疑応答（午前の部）

井上舞（神戸大学大学院人文学研究科）

それでは、ここで内田雅夫さんと河野克人さんの報告について、質問を受け付けたいと思います。

安藤幹雄（神戸大学学長特別補佐）

安藤と申します。協議会には初めて参加しました。具体的なお話で、どれもとても興味深かったです。内田さんのお話に出てきた、「語り継ぐ」や「未来につなぐ」というのは基本的に縦の関係を意識した言葉だと思います。東灘区21万人の内、震災後に来られた方が7割だったと思うのですが、そうした新しく来られた方々に、だんじりの話や震災の記憶を伝えたり理解してもらうことは大変難しいことだと考えます。どういった工夫をしているのか気になったので質問しました。

内田雅夫（住吉歴史資料館）

東灘区21万人の内、震災後に来られた方が7割かどうか私は分からないのですが、いずれにしましても、おっしゃられた通りの難しさはあります。実際ほとんどの人が知らないわけです。河野さんのお話にもありましたが、ものはあるけれども活用されなければそれは単なる「もの」に過ぎません。ではどうするのか、ということになるのですが、一つは小学生や中学生にわれわれの活動を伝える。そういった場が年に1回だけですけどあります。それともう一つ、東灘区役所のまち

づくり課の方々に震災資料集などを見てもらって、行政側の人間にも震災復興や地域の歴史を知ってもらう取り組みもしています。

佐野允彦（西脇市文化財保護審議会会長）

引き続き内田さんへの質問となります。さきほどの発表には直接関係しないのですが、住吉神社とだんじり祭りに関することで気になっていることがありますので質問します。３年ほど前に新しい東灘区の図書館が出来ました。その中に住吉だんじり資料館と呼ばれる施設があります。そこの展示説明の中に、住吉神社の由来という項目があるのですが、「神功皇后の三韓征伐」という言葉が出てきます。私はこれを見て非常にびっくりしました。いまどきこんな言葉が流布しているのかと思ったわけです。あくまでも住吉神社の由来として載せているのであれば、それほど目くじら立てることではないでしょう。ただし、市立図書館という市民向けの生涯学習施設の中にそういった言葉がを載せる説明文があることを看過してよいのでしょうか。だんじり祭りとの関係で内田さんたちはどのように考えているのか。また、図書館を運営している教育委員会はどのように考えているのか。本日は教育委員会の方もいらっしゃっているようなので、あわせてご回答いただければと思います。

内田

住吉歴史資料館と住吉だんじり資料館は全く別の組織です。われわれはあそこの展示とか説明文には一切タッチしていません。もしも、われわれがそういったことに触れなければならない場合、「日本書紀によると」といった形の但し書きを必ず付すことにしています。また、「征伐」といった露骨な言葉も使いません。

岩瀬秀子（丹波篠山市立中央図書館地域資料整理サポーター）

いまの内田さんへの質問のついでですが、報告中、だんじり祭りの賄い方に関して、参加している女性を「おばちゃん」呼ばわりしていましたが、私のほうの地域ではそういった呼称は用いません。嫁や姑､婦人会といった言葉も使いません。その点で住吉は遅れているなぁと感じました。たしかに昔はそういった呼称も使いましたけど、国際民主婦人連盟が出来てからそういった言葉は使わないようにするのが普通となっています。

鳴瀬美智子（丹波篠山市立中央図書館地域資料整理サポーター）

河野さんの報告への補足のようなかたちになりますが、いまの岩瀬さんと一緒に丹波篠山市立中央図書館の地域資料整理サポーターをしている鳴瀬と申します。現在は以前に編纂された『丹南町史』に関わる史料の整理をさせていただいております。それに関係して資料の適切な保管を教育委員会などにお願いしてきました。何のお返事もいただけなかったのですが、今回市史編纂の予算がつくということで、急遽私たちの活動も脚光をあびるようになりました。昨日から図書館内で私たちが６年間やってきた活動についてのパネル展示を始めました。16 日まで開催予定です。初めての試みなもので、思ったようにいかなかった部分もあるのですが、昨日は同じ資料整理サポーターの仲間で丹波織りをやっている女性が糸紡ぎの実演をしました。来館した子供たちも興味を示していました。市史編纂事業を契機に、適切な資料の保管場所を行政側が用意してくれることを期待しています。

千種浩（神戸市教育委員会文化財課）

神戸市教育委員会の千種と申します。さきほどのだんじり資料館の件ですが、東灘区の図書館の隣にある住吉だんじり資料館は教育委員会の施設ではございません。あれは一般財団法人住吉学園さんが作られた施設です。事実確認として申し上げておきます。

井上

時間が超過しておりますので、ここで質疑を一

度切りたいと思います。もし質問があるようでしたらお昼休憩の際に個別にしていただければと思います。

第２部　趣旨説明
地域歴史遺産を未来につなぐ－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－

井上舞
神戸大学大学院人文学研究科

今回の協議会のテーマは「地域歴史遺産を未来につなぐために－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」としました。

午前中の品田裕理事、奥村弘センター長、報告者の内田雅夫氏のお話にもありましたが、阪神・淡路大震災から今年で 25 年となります。その時に行われた被災資料の救出がきっかけとなり、地域連携センターは創設されたわけですが、この間、列島各地がさまざまな災害に見舞われまるなかで、被災資料の救出を担う史料ネットというボランティア団体が各地に生まれました。これについては、マスコミ関係者からも注目いただいております。ですので、被災資料の救出という取り組みやその意義については比較的よく知られるようになったと思います。その一方で、災害や災害後の対応に関連して生まれてくる資料―われわれはこれを「震災資料」と呼んでいますが―については、まだまだ周知されていないのが実情ではないでしょうか。

こうした震災資料は阪神・淡路大震災の時からあったわけですが、25 年という年月の経過によって震災自体を知らない人も多くなってきました。事実、神戸大学に在籍している学生はほとんどが震災後に生まれた世代となります。震災の話をしても歴史の教科書に載る一事件程度にしか捉えてもらえず、県外出身の学生に至っては「授業で初めて知った」という感想文を寄せてくる子もいます。このような状況を踏まえるならば、阪神・淡路大震災に関する記憶や記録を次の世代にどのように伝えていくかが問われているといってよいでしょう。この問題を考える際に、震災資料の存在は看過しえないものです。

記憶や記録の継承は、なにも大きな災害を経験した地域特有の問題ではありません。過疎化による人口減少に悩む地域でも同様の問題は生じています。人口減少は地域に伝わる歴史資料を守っていく担い手や地域の歴史を知る人間の消滅を意味します。このような地域では平時の時間経過自体が記憶や記録の消失と一体となっているわけです。

以上のような問題関心のもと、今回の協議会では「地域歴史遺産をどのように未来につなげていくか」に関して皆様と議論したいと思っております。テーマの副題にもありますように、「阪神・淡路大震災」と「地域の取り組み」それぞれについて報告者を立てました。前半では本学の佐々木和子氏と吉川圭太氏より阪神・淡路大震災の震災資料に関する報告をいただきます。そして後半では香美町の石松崇氏と香寺町の大槻守氏よりそれぞれの地域で行われている「地域の歴史をつないでいく」取り組みについて報告いただきます。そして最後に白水智氏よりコメントをいただき、全体討論を行う予定です。

第２部　報告①
阪神・淡路大震災をのこす

佐々木和子
神戸大学地域連携推進室

ご紹介に預かりました佐々木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。阪神・淡路大震災から 25 年ということですが、長かったようで短かったという感じがしております。この 25 年間、正確に申しますと 24 年間、私は震災資料の収集・保存の仕事に携わってきました。本日は 20 分程度の持ち時間なので、とても全てをお話することはできません。ですので、始まりのあたりに絞っ

て話をしたいと思います。震災資料の活用については、この後の吉川さんが被災地「外」の視点、あるいは若い人からの視点など「新しい視点」についてお話する予定なので、そちらにうまく接続できるようにしたいと思います。

さて、震災資料や震災の記録の問題は非常に早い時期から被災地で取り上げられてきました。1月17日に地震が発生した後、2月に史料ネットが開設されました。そして、3月の終わりにはボランティアグループの中から「震災・活動記録室」が立ち上がります。歴史や資料保存の専門家でない人たちが、震災の活動そのものの記録・保存を行うようになるわけです。4月になりますと、図書館員や地域のアーキビストが震災の記録を残すために「ライブラリアンネットワーク」を作ります。こういった活動から明らかなように、非常にたくさんの人たちが早い時期から震災の記録を残す活動を始めていたわけです。よく言われるのですが、未曾有の地震との遭遇によって「自分たちの街で何が起こったのか」という問題関心が大地の揺れと共に喚起され、そのことを歴史的に考えたいという衝動が「記録を残す」という動きにつながったのです。10月には兵庫県が震災に関する資料や記録の収集を開始します。当時の兵庫県知事・貝原俊民氏の著書『大震災100日の記録－兵庫県知事の手記－』の中にも震災の活動を記録として残すことについて言及されています。「兵庫フェニックスプラン」と呼ばれる復興計画の中に位置付けられました。

歴史研究者が資料を保存していく動きはこうした中で起こりました。具体的には被災史料の救出で、歴史資料保全情報ネットワーク、いわゆる史料ネットがこれを牽引しました。一方、私は兵庫県の外郭団体である21世紀ひようご創造協会の取り組みにかかわることになります。この21世紀ひようご創造協会と史料ネットが協力して震災資料の収集・保存活動についてさまざま事業を起こしていくことになります。

震災資料の収集・保存と言えば、東日本大震災以降は「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ」、いわゆる「ひなぎく」によるデジタルアーカイブがよく知られていますが、阪神・淡路大震災の頃はそもそも何を集めたらいいのか、あるいは集めることにどういう意味があるのかもよく分かりませんでした。そこで、そのための研究会が始まります。

1996年2月に「第1回震災資料の保存と編さんに関わる研究会」が開かれました。地域情報センターと呼ばれる部署が担当だったのですが、そこのセンター長と桃山学院大学の教員だった芝村篤樹先生がお話をされました。また、全史料協近畿部会の大西さんにもお話をいただきました。つまり、兵庫県の事業には当初より歴史学や資料保存の専門家が関わっていったということになります。そこで議論となったのは、「震災の体験を記録して残していく」方法です。一つは記録史として残すこと。そしていま一つは原資料そのものを残していくことです。これは非常に重要なポイントだと私は思っています。また、その研究会では民間資料は呼びかけても集まってこないので、ルートを辿って集める必要があるという意見が出ました。震災資料の収集・保存は誰も経験したことのない仕事だったので、こうした意見は大変貴重なものでした。実は1995年8月に避難所は解散したので、避難者の資料が思うように集まらないことは明らかでした。そんな中で10月にもう一度研究会が開かれます。場所は神戸大学でしたが、私が関わるのはここからです。まだ記憶していますが、センター長はその時、「行政批判したものも収集・保存していきたい」とはっきりおっしゃりました。

今から思えばこれは非常に大事な発言だったと思います。ご記憶の方も多いと思いますが、当時は行政批判が非常に高まっていました。また、社会学の岩崎信彦先生からは、震災資料の収集について「被災状況の把握」や「緊急対応」に限らず「復旧」や「復興」に関する資料も収集対象にすべきであるという提案がありました。この後、私は1996年12月に震災資料の収集・保存の専門嘱託員として採用されます。阪神・淡路大震災の

復興に関する記録や資料は、大都市直下型地震の経験を記すものであり、貴重な教訓として地域や時代を超えて後世に残していかなければならない。こうした理念のもと、本やパンフレットに限らず個人のメモや体験記、ビラ・チラシ類、避難所の壁新聞や集会を記録したノートなど多様な資料の収集に取り組み始めます。もちろん、映像情報や音声情報も収集の対象としました。

1996 年 5 月に芝村先生主導のもと震災資料の収集に関するマニュアルが作成されます。これによると、収集の対象となるものは、1. 今回の地震の実態、2. 地震被害の実態、3. 地震への対応の実態、4. 被災者の生活実態、5. 復興計画・事業の経過などを示す資料･記録類となっています。この内、 4 と 5 が後々大きな意味を持ってきたと思います。

それまで地震の記録と言えば、揺れと被害の記録という認識が一般的だったのではないでしょうか。そこに、被災者の生活や復興の実態も残そうということになったわけです。収集された震災資料の多くは現在、人と防災未来センターの資料室に入っています。奥村先生がよく 1995 年の正倉院文書という言い方をされますが、まさに被災地域の生活そのものも資料として残されたのです。

よく本学でも「文理融合」という言葉が使われますが、災害への取り組みは必然的に学際的な性格を帯びてきます。それまで歴史学の人が社会学の人と一緒に仕事をする場面はほとんどなかったのではないでしょうか。震災資料の収集・保存は歴史学と社会学の人たちが垣根を越えて一緒に取り組んだ事業でした。事実、専門嘱託員は私を含め 3 人採用されたのですが、歴史学からの推薦が私でほかの 2 人は社会学専攻の博士課程の院生さんでした。

さて、仕事の中身に入っていきます。私たちに与えられたのは旧避難所のリストだけでした。しかも、未整理で書式もばらばらでした。そのリストを渡されて、「震災に関するものは何でも集めてきてください」と言われました。原資料をもらってもいいし、もらえなければコピーでも可と。自由裁量と言えば聞こえはいいですが、こうした形で収集活動は始まりました。先ほど少し触れましたが、行政批判の資料が収集対象になっていたことは、被災者と話をする際に非常に助かりました。行政批判の声が高まっている中で、兵庫県の仕事として被災者に向き合うと最初は身構えられるのです。しかし、「いやいや、行政批判のような資料でも構いませんよ。すぐに公開できるかは分かりませんがそういったものも必要ですからぜひください」とこちらが伝えると話がスムーズに進んだものです。

1998 年に「阪神・淡路大震災記念協会」が出来ると、私たちの活動はそこの所管となりました。その時、兵庫県が震災資料の調査事業を厚生労働省の緊急地域の雇用交付金事業を利用して始めます。兵庫県の 10 市 10 町を対象に計 400 人余りの人が地域に入って震災資料の調査活動に取り組みました。3 人で活動している時から、「まだ出したくない」「預けるにはまだ早い」といった声を多く聞いていたので、この事業は「収集事業」ではなく「調査事業」という名称にしました。この事業で分かったのは聞き取りの重要性です。「資料はない」とおっしゃられる方でも、震災体験の話を聞いているとふいに「あぁメモがあったような・・・ちょっと確かめてみるわ」といった感じになり、目の前に資料が出てくる。資料調査における聞き取りの力を痛感しました。

以上が兵庫県による震災資料調査事業の概要ですが、収集された震災資料は神戸大学附属図書館の震災文庫、人と防災未来センターの資料室、それから「震災･活動記録室」の活動を継承した「震災･まちのアーカイブ」などに収蔵されています。また、人・街・ながた震災資料室や尼崎地域研究史料館にも震災資料は収蔵されています。神戸市の震災関連文書は神戸市が収集・整理を始め 2 年前に活動を終えました。

最後に課題について。現代資料の保存は大量の資料の整理方法と不可分の関係にあります。古文書のようにある程度数の限られたものと同様に整理していくことの是非や、整理に携われる人員の

問題が常に付きまといます。それから、デジタルアーカイブと現物資料について。先ほども少し触れましたが、東日本大震災の震災資料は「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ」、いわゆる「ひなぎく」によるデジタルアーカイブによって進められています。しかし、デジタルと現物資料と関係についてはまだ課題が残されていると思います。そしてもう一つ、記録に残らない出来事の継承です。つまり、人々の記憶をどのように伝えていくのかということです。自分自身の体験に即して言うと、記憶のみに頼るのは怖いことだと思います。私は5時46分に揺れて、外へ出るために1階の部屋に降りる時に火事が起こっていたと100日間思っていました。たがそんなことは絶対にないですよね。あの時間帯だと、もう一度2階の自分の部屋に戻って降りる時に窓の外を見て火事が起こっていることに気付いたはずです。ですから自分の体験でさえ必ずしも正確な記憶とはならない。しかし、記憶が大事であることに変わりはありません。こうした記憶をどのように継承していくのかは引き続き考えていきたいと思います。

実は私は戦災がもともとの専門です。本日の協議会のキーワードは「25年」ですが、実は空襲記録運動は戦後25年目から始まります。当時15～16歳だった子どもが大人になったことと、アメリカで戦災関連戦資料の機密が解除になり公開され始めたことが契機です。戦後25年を経て状況が変わる中で、記録と記憶とが相まってこの活動は始まったわけです。ですから、震災についても25年経ったけれど25年目からまた新しいスタートを切ることが可能なのではないかと思います。私はアメリカの公文書館で戦災資料の保存の様子を見たことが、震災資料の保存を行っていくときに非常に参考になりました。戦災資料はアメリカ側にとっては戦略爆撃が有効か否かの資料なのですが、25年あるいは50年経つと私たちは別の視点で活用することができることも学びました。震災資料の保存・活用にも時間軸を用いることが有効だと思います。震災資料はその後どのように活用されたかについては、次の吉川さんに報告していただきたいと思います。よろしくお願いします。

第2部　報告②
阪神・淡路大震災の記憶を歴史として
つなぐために

吉川圭太
神戸大学大学院人文学研究科

神戸大学の吉川と申します。よろしくお願いいたします。協議会で登壇するのは初めてです。少しだけ自己紹介しますと、私の出身は福島県です。つまり、阪神・淡路大震災を体験していません。大学も東北で2009年から3年間、人と防災未来センターの資料室で働き、その後に神戸大学に来ました。ですので、東日本大震災も直接は体験していません。そういう人間なのですが、なぜか縁あって震災資料の研究や活用に携わっています。先ほど佐々木先生の口から「新しい視点」というフレーズが出ましたが、今日は極めてオーソドックスな話をします。ただ、震災とか災害と言うと、防災とか教訓とかそういう話になりがちなのですが、今回は震災資料を通して災害を歴史的に捉えるということに重点を置いています。災害を取り巻く状況を歴史研究でどのように捉えるかということですが、あえて言うならばこれが「新しい視点」かもしれません。逆に言えばそれほどまでに震災資料は歴史研究に活用されていないのです。こうしたテーマを「展示」に即して述べていきたいと思います。

神戸大学に着任してからいくつか展示を行いました。2014年度には「記憶から歴史へ：阪神・淡路大震災を知らない世代の取り組み」を開きました。2年前の2017年度には「阪神・淡路大震災をみつめる：大木本美通追悼写真展」を開きました。大木本さんについてはまた後ほどご紹介します。この成果を受けて昨年度末に『阪神・淡路

大震災を撮る：大木本美通追悼写真集』を作成・発行しました。そして現在、「草の根市民メディアからの発信：「ミニコミ」から問う阪神・淡路大震災」を神戸大学附属図書館社会科学系図書館の２階で展示しています。学生が主体となって震災資料を研究し、その成果を展示にまとめたものです。本日は追悼写真集と現在の展示の二つを中心にお話しさせていただきます。

まず、追悼写真集から。大木本美通氏は 1937 年の生まれで、1961 年から朝日放送神戸支局の放送カメラマンになり、仕事の傍ら趣味でフィルムカメラを片手に戦後の神戸の様子を撮り続けた人です。震災直後からは長年にわたり被災地の変遷を丹念に撮り続けました。1995 年 1 月 17 日から 2002 年までに撮影された記録写真 21,000 枚余りは神戸大学附属図書館の震災文庫に寄贈されています。震災文庫のデジタルギャラリーで公開されていますので誰でも閲覧できます。その後、大木本さんは震災 10 年にあたる 2005 年に神戸の臨海部を中心に改めておよそ 1,000 枚の写真を撮り歩きました。さらに震災 20 年にあたる 2015 年にも、また改めて被災地神戸を中心に撮り歩きました。この時は震災復興再開発及び区画整理事業が実施された地区を重点的に回っておよそ 1,000 枚の写真を撮影しています。大木本さんは 2017 年 7 月に逝去されましたが、撮影された写真をもとに作成したのが追悼写真集です。私自身は人と防災未来センター在職時の 2010 年ぐらいからお付き合いがあって、何度かご自宅にお邪魔していろいろお話を聞きましたが、もっと聞いておけばよかったなと後悔しているところです。

震災発生直後、妙法寺に住んでいた大木本さんは戸棚にあった「ローライ 35」と呼ばれるコンパクトカメラをポケットに入れ旧居留地にある職場を目指し歩き始めます。その道すがら写真を撮り続けました。カメラマンなので素人と違ってシャープに撮影するのですが、手ぶれ写真もままあります。それだけ動揺していたのでしょう。最終的には大開駅の辺りでフィルムが切れてしまいます。

その後も被災地の姿を撮り続けるわけですが、写真のネガ帳などにはどういう所に着目して撮影したのかといった大木本さんのコメントが記されています。また、写真はいずれもデジタルではなくフィルムカメラで撮影されました。フィルムでの撮影は、その時のある時間・ある空間を切り取るという行為であり、それがリアルで本物だと大木本さんは後に述べています。

撮影対象地域は広範囲に及びますが偏差もあります。これは同時に一人の人間を通した震災の記録写真であることを意味します。行動が制約されていますから、その中でしか撮影できないという条件があるわけです。被災地の西側は撮影できたけれども、東側は撮影できなかったわけです。だから、有名な JR 六甲道駅の倒壊などは写すことができませんでした。

大木本さんの写真を用いて追悼写真集を作ったのですが、私自身は直接震災を体験してない人間なので編集には大変苦労しました。一つは構成ですね。震災以前の写真をどう組み込むか。10 年後 20 年後の様子をどのように配置するのか。さらに、そこに大木本さんという一人の人間の軌跡をどのように投影するのか。それからもう一つ、写真選定も苦労しました。物理的に点数が多いこともさることながら、まずは写真ごとに大木本さんの関心がどこにあったのかを的確に読み取らなければなりません。これが難しい。それから何を取り上げるべきか。震災体験は人それぞれだと思いますが、そうなるとますます何を取り上げればよいかが分からなくなるわけです。当初は震災体験のない私が取捨選択したり構成を行ったりしてよいのかという違和感がありました。ただ、よくよく考えてみればそれは歴史研究を進めていく上では当たり前の行為であると考え、途中からは開き直って写真集を作りました。

撮影地点の特定の難しかったです。そもそも私にとって土地勘ない地域が多いのでとにかく調べて聞いて歩くしかありませんでした。これと関連して写真のキャプション作成も困難を極めまし

た。震災前の神戸について、戦災復興や闇市の研究はそれなりにあるのですが、高度経済成長期以降の具体的な地域に関する研究は私が調べた限りほとんどありません。震災を地域の歴史の中で捉える視点、具体的な地域の歴史の中に落とし込んで震災を捉えていくことが必要だと感じました。

この課題を反映させたのが次の展示の話です。これについては展示作成に携わった院生にコメントをいただく予定です。私からは概要のみお話させていただきます。まず、この展示は文学部の日本史演習の一環としたものです。阪神・淡路大震災非体験世代の受講生6名を私が指導する形で進めました。私個人の経験と問題関心から展示の中心は「震災ミニコミ」にしました。と言いますのも私は2017年から愛媛資料ネットなどと共同して伊方原発反対運動資料の保存・整理を行っています。この資料群の中に個人・団体発行のミニコミが多数残存していることに気付き、戦後の市民運動におけるミニコミの役割に関心を寄せるようになりました。翻ってみると、阪神・淡路大震災でもミニコミが震災資料として大量に残されているわけです。現在はインターネットやSNSが普及したおかげで情報配信もそれに依存していますが、震災当時は手書きがやワープロで書かれた紙媒体が活躍した時代でした。震災ミニコミという媒体を通して戦後の市民活動の流れの中で震災やボランティア元年というものを捉え直してみたい。こういった問題関心が私のなかに芽生えたわけです。

授業の流れはオーソドックスな歴史研究の手法そのものです。文献講読から各自課題を設定して、資料調査・分析という流れですね。調査先は震災文庫、人と防災未来センター、震災・まちのアーカイブ、以上の機関に残された資料を調べてもらいました。その上で原稿を書くと。かなりハードな課題だったと思いますが、学生の皆さんはしっかりやってくれました。

学生たちが選んだテーマは「避難所」「メディア」「テント村」「路上生活者」などです。学生がこういうテーマを選んでくれたので、私も勢いづいてしまって「借り上げ復興住宅」とか「県外避難者」とか「公的支援要求」などを付け加えました。奥村先生の開催趣旨でも触れられていました先日の情報交換会の際には、学生に展示解説をしてもらいました。

さて、まとめに入ります。震災を地域の歴史の中で具体的に把握することが継承の前提になると思います。単なる防災とか教訓だけではつないでいけません。そのためには、まず資料を調べて読み込む必要があります。加えて被災地を歩き体験者から話を聞く。この繰り返しが大事です。こうして知識を得ていくわけですが、さらにそこから現実的な問題として物事を認識するという方向に転換していく。これはなかなか難しいと思いますけども、ただ単に知識を得るだけではなくて、そこからどのように震災に近づいていき認識するのか。資料があるからこそこの過程はたどることができるわけです。写真集の作成や展示ではこの点を強く意識しました。

最後に課題です。いくつかあるのですが、まず25年という時間の経過によって当時活動していた団体や個人に連絡が取れなくなってきています。人と防災未来センター在職時は連絡が取れていた団体に今回改めて連絡をしたらもう取れなくなっていました。この問題は資料の二次利用許諾、つまり著作権の問題につながってきます。連絡が取れないとなかなか許諾が下りないわけです。同時にこういう状況なので体験者からの聞き取り調査は急ぐ必要があると思います。

二つ目は、阪神地域に残された膨大な震災資料の活用です。これをどのように調査・研究・活用していくのか。残された資料を通して震災に迫っていくという方向性をしっかり提示しておかないと資料の活用はもとより震災を継承していくことさえ難しいと思います。

三つ目は恒常的な調査・研究の必要性です。今回は展示ありきだったのですが、やはり日常的な調査・研究の積み重ねの上に展示はあるべきだと思います。「何周年の展示をやるから調べましょう」ではなく、調べていく中で明らかになった成

果をもとに展示を行う。さらにいえば私が担当したこの授業を大学でどのように位置づけていくのかも課題であると思います。

四つ目は少し話が飛びますが、昨今のデジタルアーカイブどのように考えるかということです。デジタルアーカイブは入り口だと私は思っています。デジタルアーカイブを否定するわけではありません。すごく有効です。しかし、それはあくまでも入り口です。その先にはやはり研究や調査が必要になりますし、そのためには資料と人をつなぐ「人間」が必要です。ここでいう「人間」とは専門職や体験者や関係者といった資料情報に精通している人を指します。私たちが資料にアクセスする際、有益な情報を提供してくれる人ですね。そういう人がいてこそ震災資料ないし現代資料は活かされるはずです。

時間はほとんどないのですが、ここからは今回の展示に携わってくれた院生の跡部さんから簡単にコメントをいただきたいと思います。

吉川報告へのコメント

跡部史浩
人文学研究科博士課程後期課程

写真集、企画展の作成に参加いたしました、跡部と申します。今回、参加した学生として感想を含めたコメントとのご依頼をいただきました。展示作成にあたっては吉川先生、「震災・まちのアーカイブ」から多くのご指導をいただきましたので、印象的なご助言を中心に2点を申し上げたいと思います。

第一に、佐々木先生から当時のボランティアについて、「何かしたいという個人の周囲に人々が集まっていた、非常に属人的なものだった」というご指摘が、強く印象に残っております。

佐々木先生からのご指摘は、「戦後市民社会を生きた人々の経験との関連から震災を理解する」という企画展の趣旨に関わる、すべてのセクションに通底するものだったと考えます。私が担当した神戸大学学生震災救援隊からは、今回未収蔵の史料を新たにご提供いただきました。救援隊は大学院生協での運動経験を持つ、当時夜間部の学生が結成の核になったのですが、96年に世代交代を迎えます。その際、旧代表が「最近の通信は教条的だ、読者は我々の顔見知りなのだから、そこまで言わなくてもわかる」と述べて、新世代を批判していたのは、佐々木先生が指摘する属人的性格をよく表しているのではないかと思います。このご助言は活動の当事者と接しながら資料を収集されてきた経歴ならではのもので、震災当時を知る方の記憶を残す重要性を改めて感じました。

第二の点として、他方で佐々木先生や季村さんは、「震災を知らないからこそ、切り込んでゆける独自の立場がある」として、震災を知らない、若い世代が震災を検討する意義をもお話されていました。体験談の聞き取りなど一方向に知識を受け取る関係でなく、資料の検討結果を提示することで経験者も新しい発見をし、再度コメントを受け取る、という双方向の対話を、震災資料は与えてくれるように思います。

時間の経過ということに関わっては、「キャプションを省いて観覧者の経験に訴えるような展示はいつか再検討すべきタイミングがやってくる」と吉川先生はつとに繰り返されていました。発災からの時間経過に伴って、資料の意味付け、それに応じた展示方法も移り変わるものかと思います。震災から25年を経て、神戸市民に限っても4割が「震災を知らない」といわれます。当時の社会状況を含めて震災を「歴史」として理解するために、ミニコミ誌をはじめとする文字資料の活用・研究は今後重要性を増すかと思います。こちらは質問になりますが、佐々木先生、吉川先生は今後新たな世代が震災史料を活用・研究していくことの意義や、そのための環境整備などの課題をどのようにお考えでしょうか。

拙い内容ではありますが、以上をコメントとさせていただきます。

第２部　報告③
地域の記憶をつなぐために
－香美町無住化集落の場合－

石松　崇
香美町教育委員会

ただいまご紹介いただきました、香美町教育委員会の石松と申します。ここまで震災の話の流れなので、少しだけ震災と自分の関わりについて話します。私は現在、但馬の香美町香住というところに住んでいますが、生まれは東灘区です。その後すぐに北区に引っ越したのですが、大学卒業の年が震災のあった平成 1995 年でした。ちょうど県の埋蔵文化財調査事務所でアルバイトをしていた時で、三宮の惨状を目の当たりにして何とも言えない気持ちになり、そのまま三木の現場にずっと引き籠もった記憶があります。震災復興に直接は関わっていないのですが、あれから 25 年経って震災を再び思い出すような会でお話するのも何かの縁かなと思っています。

話を戻しますが、私は 1 人で文化財担当をしています。それ以外にも公民館事業とか文化ホール事業などにも携わっています。こうした状況ですので、神戸大学さんから文化財のことについてしゃべってくださいという依頼があると、文化財担当者としての矜持を思い出すので非常に嬉しいです。報告タイトルは「地域の記憶をつなぐために－香美町無住化集落の場合－」としました。最初に言葉の定義が必要でしょう。「無住化集落」とは何か。この言葉はあまり聞き及びがないかもしれません。「限界集落」という言葉はよく耳にするかと思います。「消滅集落」という言葉も聞いたことがあると思います。「限界集落」が進むと「消滅集落」になるという説明が一般的です。「消滅集落」は人口が全部流出してゼロになった集落のことです。ところがその地域で暮らしていた人間にとって「消滅」という言葉はすごく抵抗があります。たしかに人はいなくなったかもしれませんが、そこに人が住んでいたという記録や記憶は残っているはずなのです。そして、それに対応するために作られたのが「無住化集落」という言葉です。「無住化集落」とは住民台帳上は人口がゼロであるものの、通い農業や祭礼などで地元に帰ってくる人がいる集落を指します。この言葉のほうがしっくりくるので、副題も「消滅集落」ではなく「無住化集落」としました。

香美町は但馬の一番北端に位置します。1970 年の人口は 28,000 人、世帯数は 6,700 を数えました。ところが、2015 年の人口は 18,000 人、世帯数は 6,200 となっています。完全に少子高齢化、過疎化の一途をたどっている状況です。年齢別人口も見てみましょう。昔はだいたい一学年、町全体でしたら 100 人～ 120 人いました。しかし、2016 年からついに新生児が 100 人を切りました。18,000 人の住む自治体で新しい子供が 90 人台になってしまったのです。これは地域の人たちにとってもショックな出来事でした。子どもたちは大学に行くために地元を出るわけですが、卒業しても帰ってきません。都市部に定住するわけです。5 歳～ 14 歳の 20 年後の定着率は半分あったらよいと考えています。ですから 100 人いたら 50 人は帰ってくることを期待するわけです。しかし、分母自体が少なくなっているわけですが、帰ってくる子供たちの数も先細りしていくとしか考えられません。人口動態は、出生数よりも死亡数が多く、毎年 200 人程度減っている状況です。救いがあるとすれば合計特殊出生率の推移です。全国平均は 1.45 ですが香美町は 1.8 もあります。非常に高い数値です。私の周辺でも子供が 2 人、3 人が普通で 4 人、5 人というところもあったりします。子供を育てやすい環境の反映だと思っています。

ということで、香美町の人口ビジョンは、この合計特殊出生率をもう少し上げて年間 10 人・10 世帯ずつ増やして、2060 年までに 7,500 人の人口維持を目指すことになっています。現在と比較すれば人口は激減するわけです。では、集落ごとにどのくらい人が減っていくのか。これも計算してみました。

香美町は全部で100の集落があります。あくまでも可能性ですが、5世帯以下になると予想されるのは全部で17集落。先ほどの人口ビジョンは甘めの条件で算出されたものですが、それでも17集落は維持できない可能性が高いわけです。それでは、香美町の「無住化集落」は今までどれくらいあったのか。香住区の本見塚、村岡区の小城、小代区の熱田と小長辿が該当します。この内、本見塚は集落としては無住化していません。区長を兼ねる1世帯1人が住んでいます。本見塚には枝村としてカヤノと呼ばれる集落があり、区長さんはそこに住んでいます。本見塚にはかつて金・銀・銅が採掘された鉱山がありました。一時期は「カヤノ千軒」と言われるくらい人でにぎわっていたそうです。しかし、金・銀・銅が取れなくなり採算が合わなくなったため一気に人が抜けて今に至ります。1965年には8世帯38人が住んでいましたが、1968年には廃村となり、カヤノへの移住が決まりました。人数は記憶していないのですが、3世帯が移住したそうです。それで現在は1世帯となっているわけです。

次に小城ですが、こちらは村岡区の山田というところにあります。かつては山田にも鉱山があったようで、その枝村として小城がありました。この地区の家は谷に沿って点在しているのですが、これは平家の落人が隠れ住んだなごりであるという平家伝承があります。鉱山があったので一時は隆盛を極めたようですが、1757年に江戸幕府が鉱山を直轄するとの噂が流れたため放棄されたと言われています。

小城の住民は集団移転をしました。私も手伝いとして参加しましたが『小城追憶』という本があります。これは2011年か2012年の大雪がきっかけとなって作成されました。集団移転後も通い農業によって人の出入りがあった小城ですが、積雪による家屋の倒壊を目にした郷土史家の方が何とかして小城の記録を後世に残そうと動いて、この本が作成されました。

次に熱田です。ここは小城よりも標高の高いところにあります。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、2019年12月22日付の『神戸新聞』に「「和牛の聖地」記憶伝える　雪害機に50年前廃村　香美「熱田」」という記事で取り上げられた地域です。ここも集団移転をしたのですが、移転先で「熱田」の集落を名乗っている方が1世帯1人います。今年3月末で「熱田」というコミュニティ名を休止することが決まっていたので、『神戸新聞』で取り上げていただいたのだと思います。集団移転のきっかけは1968年の大雪でした。一旦雪が止んだので主婦6人が買い出しにいったのですが、帰って来る途中、雪崩に見舞われて1人が亡くなりました。その際、区長さんに対して消防団の人が「どうしてこんなところに住んでいるのか」と言われ、それがきっかけとなり集団移転を決めたそうです。

次に小長辿ですが、ここも集団離村したところです。ここは県指定史跡名勝天然記念物である大トチノキが有名です。なぜこんなに大きな木が育ったかというと、実は前身は防雪林でした。だから地元の人は伐採を禁止したわけです。ところが想定した場所と違うところで雪崩が発生し死者が出てしまいました。その後、「100円道路」といって地元の人がお金を負担し合って他の集落までの道を作りました。道が出来ることによって通い農業が可能となる。定住の意味が薄れていき集団離村につながったのです。

さて、すでに触れましたが、こうした地域の記録は一体どのように残されたかをお話したいと思います。1969年には県の調査で小代地区の民俗資料緊急調査が行われました。熱田や小長辿区も調査されています。翌年、『小代　小代地区民俗資料緊急調査報告』としてまとめられますが、その序言には「離村の原因はあえて今日の経済成長の影響のみに帰することは当たらない。現代人の疑問はむしろ素直にどうして今までそんなにまで不便な土地に人びとは住んでいたのかという点に向けられるだろう」と書かれています。地理的環境や歴史的環境から衣食住、方言、伝承など多岐にわたるジャンルについて専門家が記述しています。あとがきには「過疎の嵐のなかで、この地域

は今後どのように変化していくのか。この報告書が高度経済成長の波の中で揺れ動く平和な故郷の姿を長い我が国の歴史の一コマとして後世に伝えてくれることを切に願っている」と書かれています。

小長辿は集団移転後もその名を残していたのですが、1995年に正式に廃止することが決まりました。そこで離村した元住民によって作成されたのが『郷愁小長辿』です。先ほども述べましたが、雪害のひどさ、それによる不慮の事故、そして「100円道路」の整備のおかげで通い農業が可能となった。これが人口流出の原因であり集落を捨てた理由であるとこの本には書いてあります。

次にさきほども触れました『小城追憶』です。作成経緯についてはすでに話しましたが、作成中、1960年代の未刊の民俗調査資料がでてきたため、それも掲載している点を付言しておきます。

さて、時間もないので次に進みます。今度は「記録」ではなく「記憶」についてです。これについてはまず、『おじろに生きる』という本を取り上げたいと思います。これは美方町産業課の農業青年クラブによる高齢者への聞き取り調査をまとめたものです。これとは別に、「古々路の会」という民俗学術調査グループが2018年に村岡区の地域住民約40名を対象にして2泊3日で調査を行っています。報告書も出されており内容も濃いのですが、その中で面白いと思ったのは聞き取りの対象が区長さんといった集落の代表者だけに限られず、分け隔てなく行われている点です。こうした聞き取り調査によって人の記憶が明らかになっていく過程は大変おもしろく感じました。

最後になりますが、予稿集では「モノの記録とヒトの記憶」と書きました。ここで言う「モノの記録」とは「文化財の記録」という感じで考えていただけたらいいかなと思っています。普遍的な価値を有するものが指定文化財であったりするわけですから、「モノの記録」を取るのであれば、そこに秘められた普遍的な価値を客観的視点から記録することが必要だと思います。ところが、「ヒトの記憶」といった場合、これは佐々木先生のお話にもありましたが、主観的視点であるがゆえに「曖昧さ」がどうしても付きまといます。しかし、この記憶こそ「地域の記憶」なのではないか。多様な価値を有するわけですが、それはそれとして貴重なものだと思うのです。

最後になりますが今年の1月21日に毎日放送で「限界集落」や「消滅集落」に関するニュースが放送されました。そこでは、高齢化・人口減の厳しい現実の成り行きに任せるしかない、住んでいるところを出たくないという地元の声が取り上げられていました。Yahooニュースでも記事になったのですが、それに対するコメントにこういったものがありました。「誰しもが土地に縛られる必要はない。自分が望む土地に住めばよい。集落が消滅するであればそれはその土地に魅力がなくなったからである。狩猟民が移動するのと同じだ。農耕していたから定住しただけで農耕を辞めてしまえば土地を捨てて移動してかまわない。それが人として自然な事だ。悲観的になる必要なんてない」というものです。

たしかに一理あります。一箇所に定住し続けることは歴史的に見ても珍しいことでしょう。むしろ住む場所を変えていくのが普通です。でもそこで考えるわけです。では地域の魅力って何でしょうか、と。間違いなく過去において魅力を有した時期があるわけです。その魅力が忘れ去られてしまい、うまく伝わらないからこそ放棄されたり消滅したりするのではないか。地域の魅力をひも解くにはそこに暮らした人たちの価値観、先ほど言いました「ヒトの記憶」を丹念に見ていく必要があるのではないでしょうか。その上でその地域の価値観を生み出した社会的、自然的背景を把握して、記憶と統合して考える。そうすれば「どうしてこんなところに住んでいるのか」という問いにも魅力の面から、たしかな回答ができるようになるのではないでしょうか。魅力をどのように伝えていくかは大事な課題だと思います。

もう終わりますが、最近、文化庁が『文化財の多言語化ハンドブック』を刊行しました。ここには外国人に対して文化財に興味を持ってもらう方

法が書かれています。それによると外国人にとって「指定文化財」とか「～記念物」とかいった説明では全く伝わらないそうです。そうではなく、その文化財の歴史的背景をしっかり書いたり話したりするほうが興味を持ってもらえますよと書かれています。地域の魅力を伝えるのもまさにこうした方法が必要だと思います。すみません。大幅に時間を超過しました。以上で終わります。

第２部　報告④
地域の歴史を伝える－中学校と連携して－

大槻　守
香寺町史研究室

ご紹介に預かりました大槻と申します。よろしくお願いいたします。本日お話する香寺町は姫路市に合併された郊外の集落農村ですが、いまはもう専業農家はありません。だいたい 20 集落くらいあり人口は２万人を切るくらいです。石松さんのお話で取り上げられていた香美町とは集落規模はかなり違います。しかし、香美町同様、各集落の歴史を残していく取り組みをしています。それが大字誌です。大字ごとの歴史を記述したものです。その始まりは町誌『村の記憶』の刊行でした。姫路市に合併する直前の 2005 年に出来ました。合併後にはその続編も刊行しています。

今日のお話の主題はこの後の取り組みとなります。すなわち、地域の住民にどうやって歴史を伝えていくのか、ということです。大字誌の編集は現在も継続していますが、６つの集落で刊行し、３つの集落で編纂中です。まだ半分まで到達していません。

『村の記憶』は研究者に書いてもらったものではなく、住民が作った本です。ここに特色があるわけです。これはあくまでも町全体を対象としたものであって、集落ごとの歴史は書かれておりません。自分の村がどんな歴史を経てきたのかを書き残そうという意識が大字誌の作成につながったわけです。そこで 2011 年よりフォーラム「大字誌をつくる」をだいたい２年おきに開催してきました。ここで各村より調査状況を報告してもらっています。ところがここでの報告者は『村の記憶』の執筆者が中心でした。当時６０代が執筆者の中心でしたから 20 年も経つと亡くなってしまわれた方も多くなっています。あとを誰が継ぐのかが大きな課題となっています。

そこで立ち上げたのが「『村の記憶』を書き継ぐ会」です。これは「村の記憶」を書き継ぐ人を育てることを狙いとした会で、2017 年に呼びかけて結成したものです。この会からは『新・ムラの生活史』Ⅰ・Ⅱが刊行されています。どちらも 13 人の方の原稿を載せています。村の記憶を引き続いて残していこうとする一つの力になればと思っています。

それともう一つ。中学校との連携があります。「『村の記憶』を書き継ぐ会」のメンバーも 60 代から 70 代ぐらいの年配の方で、定年になって都市から地元に戻ってきた人が多いです。この方たちに少しずつ昔の記憶を思い出してもらい記録に留めてもらっているわけです。こうした取り組みはもちろん大事なのですが、同時にやはり若い人にも伝える機会は必要だということで、浮かんできたのが中学校との連携でした。皆さまもご経験があると思いますが、昔のこと思い出すとき自分のおじいさんやおばあさん、それから近所の年寄りから聞いた話というのが案外多いのではないでしょうか。昔の子どもは近所のお年寄りや大人と一緒に仕事をしていたわけです。「山へ行く」と

いう言葉もわれわれはすぐに柴刈りが想像できるわけですが、いまの中学生はその言葉を聞いても何をするのか誰も知らないわけです。昔は大人と子どもの距離は非常に近かった。そこで話が出来たわけです。しかし、いまはそういった環境自体がない。だから何も伝わらないのです。そういった状況ですから中学校、具体的には香寺中学校ですが、そことの連携が出来たことは大変嬉しく思っております。

実は中学校側では「地域調べ学習」というものが推奨されており、それが連携につながった直接的な要因です。「地域調べ学習」の狙いの一つには「地域社会の一員であり地域の歴史や伝統文化を受け継ぎ、次の世代に引き継いで行く大切な一員であることを知る機会とする」があげられています。学校と地域社会が一緒になって何かをするというのは難しいイメージがあります。教員も生徒も忙しいですし、ましてや子どもたちを課外に連れ出して何かさせるといったことは容易ではありません。ですから、この「地域調べ学習」が設けられていたことは、われわれとしても大変ありがたかったわけです。

香寺中学校は１年生が当時５クラスありました。今年は４クラスだそうで少子化の影が差しています。「地域調べ学習」は夏休みを利用して子どもたちに地域のことを調べてもらうものです。地元の方々でこの授業の手伝いができないか、ということで香寺町史研究室に話がきたわけです。夏休みに調べたことは２学期に各クラスで発表してもらいます。私もそれを聞かせていただきました。子どもたちは思い思いのことを調べていました。その後、子どもたちがどのくらい地域のこと、まぁ山と生活との関係ですね。これをどの程度知っているのか気になりアンケートを取らせていただきました。山と生活は年配の者にとっては切っても切れない関係にあったわけです。ところがいまは全く切り離されてしまっている。里山の荒廃についてはよく耳にします。山は荒れるとまず外側に荊的なものが密生します。それによって簡単には入れなくなる。昔は山の管理がしっかりできていたからそんなことはなかったわけです。だから松茸も生えていました。昔は福知山線と播但線の沿線は松茸の名所でした。松茸狩りの季節には神戸や大阪から臨時列車まで出ていました。昔の神戸市の新聞である『神戸又新日報』にはその松茸列車にまつわる話がたくさん書いてある。おかげで県内の秋の山は大変賑わったものです。しかし、今は子どもたちに限らずそのことを知っている人はほとんどいません。

アンケートの結果はまさにその通りでした。詳細は『新・ムラの生活史』Ⅱに載せています。改めて子どもたちに村のことを知ってもらいたいと考えたわけですが、幸いにも子どもたちに村の昔の生活について話してくださいという依頼を頂戴したので、それを３学期に実施しました。香寺町史研究室には教壇に一度も立ったことないメンバーもいるので、ある意味こちらとしても新鮮な経験をさせてもらいました。話をした後、子どもたちに感想を書いてもらいました。「面白かった」と書いてくれた子もいたので、非常に気を良くしたのですが、同時に私たちがかつて経験した生活の仕方を中学生が全く知らないことを改めて思い知らされました。

昔の生活を知るには民俗資料館を見学するのが一番です。ところが、かつては全県的に作られたのですが十分に活用されているとはとても思えません。香寺町も姫路市と合併して以降、民俗資料館は市の施設にはなりませんでしたので、運営はボランティアの方が担っています。ですので、とてもじゃないけど毎日は開館できません。日曜日くらいしか開いていないのが実情です。民俗資料館にはわれわれが日常的に使用していたものが保管されています。もし孫に「おじいちゃん、昔どんな生活していたの」と質問されたら、民俗資料館に連れて行って説明できます。われわれが日常的に使用していたものは、いまや博物館・資料館に行かないと見るとこができないわけです。こうした短期間での劇的な生活変化を授業で子どもたちに話しました。

昨年度は子供たちが先に調査した上で、わたし

たちが話をしたのですが、今年度は逆に、先に話をした上で子どもたちに調べてもらうという形式をとりました。話の中身は、夏休みの調査へのヒントになるようなもので構成しています。子どもたちは7月の末に各地区に出かけて、そこで自治会長など地元の古老と呼ばれる人たちに話を聞いて調査を進めました。子どもたちの相手をしていただいたのは全部で28名でした。神社やお寺、あるいは山城や村の生活など多様なテーマを調べてくれました。その後、2学期に発表会が行われました。「知らなかったことばかりだった」ということをどの子も感じたようです。また、子どもたちの聞き取りの相手をしてくださった方にも感想を聞きました。内心、「面倒なことを押しつけられた」と思われたかなと思っていたのですが、そうしたことを言ってくる人はいなかったので大変ありがたかったです。むしろ、「地域調べ学習」を肯定的に評価してくださる方が多かったです。来週の2月13日には事業報告会ということで、子どもたちの聞き取りを担当した研究会の会員と、子どもたちから調べた内容について話をしていただく予定です。中学校との連携という取り組みを通じて、子どもたちと地域を考える環境を整えていくことの重要性を強く感じました。時間超過しました。申し訳ございません。以上で報告を終わります。ありがとうございました。

第2部　コメント

白水　智
中央学院大学／地域史料保全有志の会

神奈川県から参りました白水です。よろしくお願いいたします。神奈川県と言うと横浜・川崎のイメージがあるかと思いますが、私は山里で暮らしています。大槻さんの話にありました薪拾いには行きませんけども、我が家は薪ストーブを焚いております。そのため未だに斧で薪割りをしています。知り合いの猟師さんからは獲物がかかると電話かかってきて一緒に解体してお肉をたくさんもらいます。なので、ここ3年ぐらいは豚肉を買ったことがありません。普段はそんな生活をしています。

中身の濃い報告を聞いて、一番印象に残ったのは松茸の話です。私の家の方では松茸は取れないのでぜひそんな体験をしてみたいものだと思いました。報告の内容は大きく分けると「震災にまつわる話」と「地域文化をどう残すか・どう伝えるかという話」になるかと思います。私のこれまでの体験と絡む部分が非常に多いので、その点からコメントさせていただきます。

三つに分けて話を進めていきます。一つ目は自己紹介と私がこれまでどのような活動をしてきたかについて。二つ目は文化財の保全活動とフィールドワークの関係について。三つ目に長期にわたる文化の復興活動や歴史を残していく活動と「文化力」についてです。

まず自己紹介からですが、私は歴史学を専攻しています。フィールドとの関わりが非常に長く、卒業論文では福井県の若狭湾岸の漁村を調べて書きました。大学四年生の夏休みに一人でリュックを背負って一週間ほど海沿いをずっと歩き、地元の方々に話を聞いたりしました。そこで風景を見ることはとても大事なことだと実感しました。大学院時代からは仲間と山梨県の早川町で古文書の調査を始めました。「中央大学山村研究会」と呼ばれる会でおよそ30年続いています。早川町は石松さんの話に出てきた「無住化集落」のようなところがたくさんある町です。それから、私は山村の歴史を調べていたので、もう一つ研究フィールドがあります。それが長野県の秋山郷です。行政的に言うと長野県の栄村にあたります。長野県の一番北のはずれで新潟県に接しているところです。ここでもずっと古文書の調査をしています。また、理系の人たちも含めた共同研究も長年やっていました。秋山郷も同じく過疎の山村です。そういったところばかりを歩いてきたので、地域の歴史とか文化遺産をどのように伝えていくかとい

う問題は恒に頭の中にありました。

私が住んでいるのは神奈川県の相模原市緑区の千木良という地区ですが、そこで古文書の講読会を数年前から続けています。地元近隣の皆さんも大体 60 代～ 80 代ぐらいの方ですけども、一緒に月に 1 回のペースで地元の古文書をずっと読み続けています。皆さん本当に熱心です。すぐ近くには甲州街道の小原宿と呼ばれた小さな宿があります。そこに残されている襖の下張り文書を調べてもらえないかという依頼ありまして、数年間調べて去年だいたいまとめました。古文書の調査や資料整理は以上の場所でやってきたのですが、長野県の栄村での共同研究の最終報告会を終えて一週間後に東日本大震災の「翌日の大震災」が起きます。皆さまはあまりご存じないかもしれませんが、3.11 が東日本大震災ですが 3.12 というのが実は栄村というところで大震災のあった日にあたります。東日本大震災の正確には十数時間後の翌朝の午前四時に大地震がありました。何しろ田舎ですし被災範囲が非常に小さかったので、ほとんど報道もされませんでした。「忘れられた大震災」と呼ばれた所以です。

栄村で大震災が起きて以後、私は栄村での文化財レスキューに携わることになりました。さきほど「地域史料保全有志の会」という肩書きでご紹介いただきましたが、これは栄村での文化財レスキューの時に結成した団体の名称です。保全活動はいまも続けていますが、そうした中でその栄村の歴史文化をどのように残していくか・伝えていくかということを考えました。特に大槻さんの話にあったように、その地域を支えていく子供たちにどういうふうにそういうものを当たり前のものとして受け入れてもらえるかということを試行錯誤しながらやっています。それから、昨年秋には台風 15 号・19 号と大きな台風が関東を通過しましが、風害に遭った千葉県館山市、水害に遭った長野県長野市や飯山市の古文書レスキューにも参加しました。

こうした活動を続けるなかで気付かされたことは、「保全活動というのは結局フィールドワークの延長ではないか」ということです。私はそれまで地域に入って古文書を見せてもらい整理・調査して目録をお渡しする、あるいは地元で報告会を開くことを続けてきたわけですが、栄村で地震があった後、すぐレスキューに入れたのは何故かと考えると、やはり地域に入ることに慣れていたことが大きな要因だと思います。

話は変わりますが、いまの学生さんは例え歴史を学ぶ史学科の学生であっても、生の古文書に触れる機会自体が少なくなってきていると思います。ましてや地域へ調査に入るといった学生はもっと少ないと思います。卒業論文を書くにしても図書館や資料館にある史料を使って書く。あるいは、近現代史であれば行政資料や新聞のマイクロフィルムのデータをもとに書く。生の古文書に触れて卒業論文を書く学生は少なくなってきています。

しかし、地域へ入って調査・研究することは大事です。特に重要なのは、地域の人と接することができる点です。いろいろな話をするわけですが、そうするとその地域が直面する問題を知ることになります。例えば私の調査している山奥の地域であれば、どこも過疎で苦しんでいます。ある地区の区有文書の調査に行った際、公民館にマイクがあったことには、すごく衝撃を受けました。なぜかと言うと、そこには住民がもう二人しかいないからです。「かつてはマイクを使うほど人がいたのか」とちょっと胸を衝かれたような気持ちになったことを覚えています。地域の直面する課題を知ること、そしてその地域の歴史を伝えてきた人が目の前にいるという体験は歴史研究を進める上で非常に重要だと思います。

これは歴史学って本来誰のものなのかという問題ともつながります。いろいろな歴史学あっていいのです。地域とは無縁な国家レベルのことを論じる歴史学があってもよい。しかし少なくとも、人間不在の歴史学になってはいけないと感じています。業界の内輪話になりますが、業績だけのために論文を書くことがあっては絶対にならないというのが私の意見です。

調査に入った地域との付き合い方も重要です。民俗学には「調査地被害」という言葉があるそうです。いろんな人がいろんなところから調査にやって来る。そこで地元の人が時間を割いていろんな話をする。でも、成果を伝えてくれる人はほんのわずかしかいない。ただ論文を書いて業績にして終わってしまう。これが調査地被害なのですが、自分の調査はこうなってはいけないという気持ちがあったので、可能な限り調査先では報告会や講読会を開いています。

ところで、栄村でのレスキューの際、「こんなものも残すのか」ということをよく言われました。どのように説明すれば分かっていただけるのか随分悩みました。「古いもので大事ですから」ぐらいのことはもちろん言いましたが、それではどうも説得力がない。どうしてそれを残さなきゃいけないのか、ということをどのように説明すればよいのか。最初は自分の中でも整理がつきませんでしたが、レスキュー活動を続ける中で、それは「日常を残す」ことではないかと考えるようになりました。文化を日常活動の一部として残していく。人口の少ない田舎と人口の多い都市部。一見すると状況は全く違ったようにみえますが、実は両者に共通して言えることがあります。それは昔当たり前であった日常の文化に対する関心の薄さ、あるいはそういったものを伝えていくことの困難さです。皆さんのお話を聞きながらこの点を再度強く感じました。

さて、奥村さん、佐々木さん、吉川さんは震災の話をされました。その中で阪神・淡路大震災を体験した人がどんどん減っている、学生はもう知らない世代だという話がありました。これは人間がある出来事をリアルなものとして体験できる期間は本当に僅かであることを意味しています。大事が起きた時はみんなの共通体験として認識するのですが、それはあっという間に歴史に中に呑み込まれていってしまう。共通体験でなくなる時期が思ったよりも早く来てしまうわけです。そうすると最初に奥村さんがお話になりましたけれども、「歴史として残す」以外方法はないわけです。資料として残すことが大事になってくる。ところが、都市部や過疎地を問わず地域のたどってきた歴史、あるいは地域が蓄えてきた文化の力というものを大きく捉えたり、直に感じる機会自体が減ってしまっています。そういうものを特別なものとしてではなく、日常のものとして残していく。文化に対する関心を高める力が都市でも田舎でも必要だと思います。それをもし「文化力」と呼ぶのであれば、文化力を高めることが今求められているのではないかと感じました。

そのためには何が大事か。私は「楽しさ」だと思います。先ほどから述べていますように、私は長野県の栄村で文化財の保全活動やっていますが、「ここの地域をなんとかしなきゃ」というような使命感を持って来る人が集まるのはだいたい2年目までです。3年目以降になるとみんなはだんだん忘れていきます。そういう所で保全活動を8年続けて分かったのは、やっぱり楽しくないと活動は続かないなということです。実際、文化というのは本来「楽しむ」ためにあるのではないかと思います。その地域らしさを味わう。その地域らしさを感じる。その地域らしさを楽しむ。そのために文化というものはあるのではないかと思うようになりました。ですので、栄村での活動は基本的に楽しくやろうをモットーとしています。栄村には歴史文化館という建物が震災の復興基金を使って建てられました。昭和の初期に建てられた学校校舎を耐震改修したもので、「こらっせ」と呼ばれています。村の職員の常駐は難しいと思われたのですが、村の教育長が知恵を出してくれて公民館との併設施設にしてくれました。それで、公民館の職員がいつもそこに常駐してくれるようになりました。そうすると公民館の職員の方が村の文化講座などを一生懸命企画してくれるわけです。救出した民具や古文書もそれによって活用できるようになるわけです。公民館活動の中で資料を地元の方に還元する、活かしていく活動ができている点は、文化力を高める上で大きな希望となっています。

あらためて文化力の問題を歴史学に引きつけて

考えた場合、先ほども述べたように地域から離れた歴史学では対応できないわけです。ですから、私が以前からあちこちで訴えているのは、「歴史学という学問の必須のプログラムとしてフィールドワークを必ずさせる」ということです。フィールドワークをして生身の歴史としての史料に触れる経験を学生には体験してもらいたい。文化力を鍛えるための人材を歴史学という学問は育てなければならないと思います。

繰り返しになりますが、たまたま自分の調査した地域が震災にあって文化財保全活動に携わることになったのですが、いま振り返ってみるとこの二つは一体のものであったことが分かってきました。今日の皆さんのお話がまさにこの両輪の話だったので本当に勇気づけられました。皆さん各地でそれぞれのご苦労を抱えながら活動に携わっていらっしゃると思いますけども、地域資料の調査や文化財レスキューは少しずつ共通認識と言いますか、当たり前のものになりつつあります。そういう流れに力を得て引き続き皆さんと共に活動を続けていきたいと思います。以上です。どうもありがとうございました。

全体討論

司会　奥村弘

司会（奥村弘）

最初に大槻先生の話に関わって、中学の校長を務められている堀昌子さんにお話を聞きたいと思います。地域の歴史文化に関わるフィールドワークといった催し物への中学生の参加は難しいイメージがあります。実際、神戸大学の地域連携センターでも小野市との連携の際にその点はあまりうまくいきませんでした。香寺歴史研究会との連携がどうしてできたのかを含めてご発言いただければと思います。

堀昌子（姫路市立香寺中学校校長）

失礼します。香寺中学校校長の堀と申します。香寺歴史研究会には大変お世話になっています。

実は前々任校の姫路市の林田町に勤務していた時、ちょうど林田大庄屋旧三木家住宅が10年かけて改修されていました。ところが子供たちはそれが何か分からないし実際に見たことがない。たまたま転任した際に、オープニングセレモニーがあったので、私から自治会に相談して子供たちにも参加してもらいました。

それから旧三木家住宅に来られたお客さんを対象としたガイドボランティアの活動にも子供たちが加われるようお願いしました。すると、二つ返事で了承いただきました。子供たちの参加によって自治会も大変活性化しました。子供たちも活き活きとしており、なかには学校には行きにくいのだけれども、その活動には参加する子供もいました。メディアにも取り上げていただいたので、その結果たくさんのお客さんが来ることになり、地域の活性化にもつながりました。

もちろん大変なこともたくさんありました。軌道にのるまで5年かかりました。香寺歴史研究会との出会いはその後の香寺中学校への転任を契機とします。子供たちは全然地域のことを知らない。その代わり「グローバル化」だけが声高に叫ばれているわけですが、はたして自分の住む地域のことを知らない人間がグローバル化に対応できるでしょうか。英語なんかはポケトークがあれば誰でもしゃべれる時代ですが、彼らはしゃべる「内容」を持たないわけです。やはり地域に根ざした子供たちの育成が大事だと思うのです。外へ行って帰ってこない、ではなく、外を見て帰ってきて地域の魅力を再発見できるような子供たちですね。そういった問題意識のもと、香寺歴史研究会の大槻先生に話しを持ちかけたわけです。姫路市は図書館を利用した調べ学習に力を入れていますので、1年生はそれを夏休みに行おうと。カリキュラムのなかにそれを組み込みました。香寺歴史研究会の方々にはこの調べ学習の前に話をしていただきます。そこで子供たちが興味を持ったこ

とを夏休みに調べてもらう。調べたことは発表してもらい展示も行います。例年、オープンスクールにはあまり地域の方々は来られないのですが、今年度は展示作品をみたいということでたくさんの方々に来ていただきました。地域から子供たちを見ていただく機会にもなったと思います。これからも改良を加え、広く・長く続く活動になればと考えています。ただ、私もいつまでも香寺中学校にはいられませんので、後継者の先生を育てることが課題となっています。

奥村

ありがとうございます。一つ確認なのですが、カリキュラムの中ではどういった位置づけになるのでしょうか。

堀

総合的な学習ですね。キャリア教育の一環としても位置づけています。「地域を知る」「姫路を知る」ということで、姫路市役所にある地方創生推進室とも連携しています。

奥村

ありがとうございました。いくつかペーパーで質問をいただいているのですが、簡単に解決しそうなものからいきましょう。

午前の第1部で報告いただいた河野克人さんに対して、「市の名前が変更されたのはなぜでしょうか。地名は歴史学にとっても大変重要なテーマなので教えてください」という質問をいただいています。河野さんよろしいでしょうか。

河野克人（丹波篠山市立中央公民館）

河野でございます。本日は行政職員じゃなしに個人としてここに来ました。個人の意見としてお聞きください。

私が聞いておりますのは、丹波篠山市の北に丹波市という市がございます。氷上郡内の町が合併して出来たものですが、地元に売り出すものがないため、いろいろなPR活動等を通じて努力されました。その結果、小豆といった丹波市のブランドがメディアにも取り上げられるようになりました。結果、「丹波」といいますと「丹波市」が取り上げられるケースが多くなったのです。ところが、丹波篠山市で商売されている方々からは「よろしくないのではないか」という意見が出るようになりました。「丹波篠山」でいうところの「丹波」が「丹波市」にとられてしまったのではないか、ということですね。そんな中で出された意見が市名変更でした。すなわち、「丹波篠山市」にすればよいのではないか、ということです。実は市長はあまり乗り気ではなかったと聞いておりますが、いつのころからか市名変更の方向になり、市民に対する説明会やパンフレット発行等を通じた宣伝を行い、最終的には市民投票によって市名変更が可決されました。

私個人としましては、えっとあくまでも個人ですよ。個人としましては「丹波篠山市」は反対です。江戸時代は篠山藩がありましたので「篠山市」と名乗るはよいと思うのです。しかし、「丹波篠山」という呼称がいつ頃から出てきたのかを考えた場合、私が知る限り江戸時代にはないわけです。この呼称が出てくるのは明治以降であり、歴史的にはたかだか100年程度のものなのです。つまり、歴史に根ざした市名ではないわけです。ですので、市名をそれに変えるのはいかがなものかというのが私個人の考えです。

奥村

ありがとうございました。本日は二つのテーマがありました。一つは震災資料、いま一つは記憶の継承です。ここからはまず震災資料のテーマについて議論していきたいと思います。

神戸市の千種浩さんから、「阪神・淡路大震災の震災資料について、民間企業や個人のものも含めてさらなる収集が継続的に行われているのか。また、土木や建築などの資料も意識されているのでしょうか」というご質問をいただいております。これについては佐々木さんからお願いします。

佐々木和子（神戸大学地域連携推進室）

民間企業や個人の震災資料の収集活動ですが、これはもう担当者がいません。人と防災未来センターも資料を持ってきたら受け取るけれども、多分収集活動を積極的かつ計画的にやってはいないと思います。それから土木・建築などの資料ですが、意識されているか否かと問われれば、意識はされていないだろうと思います。

ただ、兵庫県による資料調査の時は「こういうものをも私たちは重要だと思っている」というスタンスで訪問しましたので、土木・建築に関する、例えば図面といった資料を預かったこともございます。ですので、意識はされていないけれども収集した経緯はあります。私たちは震災関連の資料だという判断を「ネーミング」と言っていましたけれども、普段何気なく使っているものについて「それ、震災関連として非常に意味あるもので私たちは重要なものだと思っています」ということをお伝えして、その時には預かれなくても使い終わったら連絡していただくよう形での収集活動は続いています。

聞いた話では、人と防災未来センターにそうした連絡が入るケースが増えているそうです。自分は非常に大事だと思っていたけれども、家族にとっては無用のものの内、震災に関係するものを「終活」の一部としてお持ちになられる方が急に増えたそうです。それから黒田裕子さんのように被災地の保健分野で尽力されていたグループなどが活動を終えるので、関係資料を箱ごと預けるようなこともあったと聞いております。ですから、資料収集の活動を短期間のものと考えてはいけないと私は思っています。非常に長い期間をかけて震災関連の資料は収集を続けるべきです。

奥村

あわせてですが、尼崎市立地域研究史料館の河野未央さんから 、史料館での震災資料の公開を考えているが、25 年目の記憶の補足も含め、今後の取り組み方について佐々木さんのご意見を伺いたいと質問をいただいております。佐々木さんお願いします。

佐々木

25 年目の記憶の補足ということですが、尼崎も被災地であり私も調査に行ったことがあります。学校避難所での体験をされた方や市の職員、尼崎では記録集も作成されていますので、それに携わった方から話を聞く必要があるかと思います。あるいは、前身が阪神・淡路大震災時のボランティア団体である現存の NPO 団体に話を聞くのも良いでしょう。そして、まずはなによりも、尼崎市市長に話を聞くのが重要だと思います。それこそ第 2 部の報告の中にも出てきた震災救援隊に携わった一人が現在の市長ですし、彼女の口からそこでのボランティア体験が政治家を志した動機であるという話を聞いたこともあります。市長に阪神・淡路大震災での経験とそこで芽生えた考えが、現在の尼崎市政にどれほど反映できているのか、あるいは理想と現実とのギャップについて話を聞いてみるのはいかがでしょうか。それは「記録の補足」になると私は思います。

奥村

ありがとうございます。もう一つ河野さんから、仮設住宅や避難所の資料の公開について質問がきています。プライバシーの問題も配慮するとなかなか公開は難しいところもあるのですが、どういう形での公開が望ましいかについて、吉川さんお願いします。

吉川圭太（神戸大学大学院人文学研究科）

私がかつて在職していた人と防災未来センターは個人情報等の関係ですぐには公開できない資料も収集しています。この点、公開できるものに特化して収集する震災文庫とは異なるわけですが、そこでの経験から申し上げると、やはり個人情報を含んでいる資料については公開にあたって段階を設けることが必要だと思います。利用申請が来たら個人情報部分をマスキングして利用者に供することも方法の一つですが、資料をどのように使

うかによって対応も変わってくると思います。利用が研究目的の場合、個人情報まで見ないと使い物にならないことはあると思います。人と防災未来センターではその場合、マスキングをして供するのでなはなく、特別利用申請の手続きを経てもらいました。研究目的だけでなく個人情報への配慮や責任について誓約した申請書を提出してもらい、問題なしと判断した場合のみマスキングせずに公開する段取りとなっていました。ですから、すぐに公開できるもの、申請があったら一部マスキングして供するもの、それから利用目的によっては特別利用申請という、３つの段階を設けていたことになります。やはり利用者側としても、こうした段階がきちんと設けられているほうがよいと思います。例えば、仮設住宅の相談記録なんかを使いたい場合、個人名は特段必要ないわけであって性別・年齢・前住地と相談内容が分かればいい。個人名のみマスキングした形の利用で十分なわけです。そして、もし何らかの理由で個人名を確認する必要が生じたなら、特別利用申請のようなしかるべき手続きを経ればよいのです。重要となってくるのはレファレンスの人間でしょう。適当な公開方法を提示できる人間がいないと利用者側としては利用しづらい施設という印象・認識が育ってしまうと思います。

奥村

佐々木さん補足はありますでしょうか。

佐々木

やはり、「使って欲しい」「使って欲しくない」という前提を史料館としてどう考えるかに尽きるのではないでしょうか。この間、私も公開についていろいろと考えてきましたが、人と防災未来センターになる前の阪神・淡路大震災記念協会では「記憶を伝える」ことを前提に据えて、震災資料については公開が原則だとしました。それに対して人と防災未来センターでは、個人情報の面から公開について制限を少しずつ付していきました。公開を原則とするのか、それとも個人情報保護を重視するのかといった前提によって、館の姿勢はまったく変わってくるなというのが率直な思いです。公開の原則によって誰かが不利益を蒙る可能性があるもののみブロックするのか、個人情報保護を重視して全てをブロックした上でどれが公開できるかを選定していくとでは、私は天と地ほどの差があると思っています。まずはこの前提についてきちんと確認しておかないと、館も人が変わっていくと必ず安全志向になり、公開に対する視野がどんどん狭くなってきます。そうした事例を私はいくつも目の当たりにしました。ある情報についてそれは公開が原則なのかそれとも否か。こうした議論をきちんと行うことが必要だと思います。

奥村

ありがとうございます。住吉歴史資料館が作成した本ではかなり個人情報に突っ込んだ部分もあります。しかし、それははっきり明記しておかないと地域の歴史が見えてこないわけです。大字誌もそうですが、個人名や地名を完全にぼかしてしまうと、逆に歴史が見えなくなる。こういった側面を踏まえながら、個人情報をめぐる公開・非公開の問題は考えていく必要があると私は思います。

さて、震災資料に関するペーパーの質問は以上となります。フロアからご意見・ご質問がございましたらお願いします。いかがでしょうか・・・。

よろしいでしょうか。それでは、第２部後半の議論に進みたいと思いますが、住吉歴史資料館の内田さんから「地域遺産の指定はどうすればよいのでしょうか」という質問をいただいております。内田さん、少し質問について補足していただいてもよろしいでしょうか。

内田雅夫（住吉歴史資料館）

具体的に申し上げますと、住吉の豪商・吉田家の墓所を史蹟にすることで、みんなの意識を高めたいということです。こういう家がかつてはあったのだと。住吉はそういうところなのだと。災害

だけで住吉を知るのではなく、身近な史蹟からみんなに意識してもらうこともできるのではないかと思っています。手続き的なことを教えていただければという気持ちで質問しました。

奥村

指定文化財や登録文化財の話につながりますが、第２部における石松さんの話にもつながると思います。まずは石松さんにご発言いただきましょう。

石松崇（香美町教育委員会）

指定の話でしたら教育委員会になりますが、まずは所有者・権利者の意向を確認する必要があります。

内田

ぜひ史蹟のようなものにしてくださいということです。

石松

そうですか。私の先ほどの話に引きつけていえば無住化集落の中にも神社があります。お盆の時期やお祭りの時期になると区長さんや宮司さんが帰ってきて、二人だけですがそこでお祭りなんかをやります。やはり精神的な支柱となっているのでしょう。ところが、集落が合併した場合、それぞれにあった神社はどうするのという話がでてきます。宗教的にはしかるべき手続きを経ればよいのですが、「御霊」のなくなった神社本体、つまり精神的支柱ではなく一つ文化財と化した神社をどう守っていくかは課題となっています。ましてや所有者の意向が確認できないとなるとうちとしても手が出せず、そのまま朽ちるに任せているというのが現状です。

奥村

白水さん、何かご意見はありますでしょうか。

白水智（中央学院大学／地域史料保全有志の会）

資料を調査する側の立場の人間としては、「何で調査をするのか」や「何をしたいのか」という意識をしっかり持つことが重要だと思います。例えば、住民が１人や２人になってしまったような集落で調査を行う場合、「一体、こんなところでこれから何をするのだ」という当然の問いへの答えをきちんと用意した上で調査に臨まなくてはなりません。地域の歴史を知りたい、あるいは知ってもらいたいという意識は当然ありますが、その地域が消滅の危機に瀕している場合、「何のためなのか」「誰のためなのか」という問いに対して、それでは不十分ではないでしょうか。

さきほど石松さんの報告の中で紹介されていたように、人の住む場所は移り変わっていくのだという意見もあるけれども、少なくとも人間の営みとして、かつてこういうところを拓いて住んでいたということを記録として残すことは重要だと私は考えます。現在のわれわれからすれば到底考えられないような山間部に人がかつて住んでいたという事実、あるいは実際に開拓に携わった方から聞くとてつもない苦労話はとても貴重なものです。消滅の危機に瀕した集落での調査に際しては、こういった意味づけが必要になってくると思います。

奥村

ありがとうございます。文化遺産をどのように価値づけて残していくかという話だったとお聞きしましたが、香寺町でも村の文化遺産をどのように残していくかが課題であったと思います。大槻さん、この点についてご発言いただければと思います。

大槻守（香寺町史研究室）

文化遺産をどのように残していくかについて、テーマ自体としては特にとりあげたことはないのですが、私どもが調査したのは村の石造物と年中行事です。石造物は村のどこにでもあるのですが、忘れられていっているというのが事実です。いままで忘れられていた石造物をもう一度見直そうと

いうことで、村でどんな意味があったのか考えています。一つ例をあげれば「力石」ですね。これはどこの村にも大抵あるものですが、いままで気付かなかった。ところが調べてみると「力石」であることが分かり、それなら残していこうということになった。まずは知ることが大事なのだと思います。知ることによってその重要性が分かる。逆に知らないと分からない。知らないものをどのようにして再認識するかを考えることが重要だと思います。調べることで記憶を呼び起こすだけでなく、そこに備わっていた意味をも理解してもらいたいと思っています。年中行事についても最近は簡略化する方向にあり、昔やっていたようにはやらなくなるわけです。昔は先輩を見ながら行事のやり方を覚えたものでしたが、若い人が村を出てしまうとそれができない。何十年かたって戻ってきても、もはや見習うべき先輩も不在ですし思い出すこともできない。結果、簡略化が進んでしまうのです。ですので、行事のやり方を残していくことにも力を入れています。

奥村

ありがとうございます。地域の中でずっと認識され続けていくような仕組みが大事であり、指定されるということはその仕組みの延長にあるものだと思います。本日は神戸市から千種浩さんがいらっしゃっているので、指定の手続きなどについて教えていただければと思います。

千種浩（神戸市教育委員会文化財課）

文化財保護法が改正され、いわゆる未指定文化財も保護・活用の対象に含まれてきました。ですから、未指定文化財をどのように位置づけていくかは、それとの関わりでいろいろな考えた方が提起されると思います。これは、現在地域に生きている人たちがどのように判断するかということとつながります。一方的に行政側が考えを押しつけるのではなく、地域が何を残していきたいのか。今後は地域と行政の話し合いのなかで未指定文化財の保護・活用の動きというものが決まってくるのではないかと考えています。

奥村

ありがとうございました。地域の中で文化遺産をどのように残していくかはいろいろな方法があると思います。それをずっと続けることが可能な全体的なシステムをどのように作るかはこの協議会でも大きな課題となっています。本日はこの点にまで踏み込んだ議論はできませんが、来年度以降引き続き考えていきたいと思います。それではフロアからの質問を１つ２つ受け付けたいと思います。

近藤詩英梨（兵庫県立御影高校生）

御影高校の近藤と申します。私たちは現在、課題研究で歴史資料の保存と活用について調べています。大槻さんの報告で中学生との連携が取り上げられていましたが、高校生でもできるような活動についてアドバイスをお願いします。

大槻

中学生には夏休みの空いている時間に調べてもらいました。授業時間も限られており、私どもが直接話をしたのは１時間程度です。地域で子供たちを交えての活動も１回だけでした。ということであまり時間をとらずに、中学生のみなさんそれぞれに課題を見つけてもらい調べたいことを調べてもらったわけです。つまり、これを知りたい、あるいはこれを調べてみたいという気持ちさえあれば問題ないと思います。強制ではなしに興味を持ってもらうことが大事だと思います。どういう形で興味を持ってもらうかは、いま地域で何が問題になっているかを認識することから始まると思います。周囲にそれを教えてくれる人もいると思いますので、興味のある対象を見つけることから始めるのはどうでしょうか。

奥村

ありがとうございます。本日は御影高校の関係者が何名かいらっしゃっています。よろしければ

百済正人先生、一言お願いします。

百済正人（兵庫県立御影高等学校教諭）

失礼します。御影高校の百済と申します。今回、協議会に初めて参加させていただきました。普段は日本史の授業を担当しているのですが、地域のことを知らない生徒が非常に多いと感じています。本日連れてきた生徒は課題研究との関係で地域のことを調べていますし、地域のことにも興味はあるのですが、全生徒がこの課題研究を行っているわけではないので、地域を知る機会さえない生徒がほとんどです。本日、報告者の皆様のお話を聞いて、私自身も普段の授業のなかで地域のことを意識する必要があると感じました。いろいろと示唆をいただいたので、課題研究や今後の日本史の授業に反映できればと思っております。

奥村

ありがとうございました。あ、それでは石松さんお願いします。

石松

私も村岡高校というところで、年に２コマ地域と文化財を学ぶ授業をしています。１コマ目は村歩きをして、さきほど大槻さんの話にあった石造物についての解説をしたりします。その後、生徒たちに自分の住む集落にある「昔からあるもの」の写真を撮ってくることを課題として出します。いまは生徒さんみんなスマホを持っているのでそれで撮影してもらいます。それで２コマ目の授業時にそれを紹介してくださいとお願いします。そして、その中から近所の人に聞いたり調べたらおもしろそうなものを選定して生徒に調べてきてもらうことをやったりしています。参考になればと思います。

奥村

ありがとうございました。学校教育の枠でどう考えるかは、今後の協議会でも取り上げたいと考えています。

本日は「地域歴史遺産を未来につなぐために－阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」というテーマのもと多面的に議論できたと思います。ただ、いつもの通り結論は出ておりません。この場で考えていただいたことをそれぞれの地域で活用していただき、またお会いしたときに深まった議論ができればと思います。それでは時間となりましたので、討論を終了したいと思います。どうもありがとうございました。